

第2章 亀山構内教育学部山口附属学校污水排水管布設に伴う試掘調査

第1節 調査の経過

山口市街を臨む亀山の西裾に開けた白石の地には、教育学部附属の幼稚園・山口小学校・山口中学校（山口附属学校と総称）が所在する。去る昭和58年度、小学校・幼稚園部分で初めて調査を行なうこととなったが、その際、小学校グラウンドから、鳥形木製品とそれを取り付ける^{さお}杵をはじめとして^{すき}鋤・^{くわ}鍬など多量の木製品、また^{かまど}竈をもつ古墳時代前半期の竪穴住居跡など、貴重な遺物・遺構が発見され、当小学校グラウンド部分は「白石遺跡」¹⁾として知られるところとなった。

白石遺跡の北側では、国道9号バイパス建設時に^{こうのみね}鴻峰山南麓に沿って多くの古墳・石棺群が発見され、また西側でも、鴻峰山から南にのびる丘陵（通称茶白山）を削った際に古墳・石棺群が見つかり、弥生時代終末～古墳時代の墓地についてはかなり明らかになりつつある。反面、亀山と^{しょうじがだけ}障子岳には含まれた、これらの墓地に伴うと思われる地域の同時期の生活跡については、この白石遺跡が実に初めての発見例であり、他は、山口高校敷地で遺物包含層が確認されているにすぎない。白石遺跡の存在は重要なものであるといえる。



Fig. 4 調査区位置図

亀山構内教育学部山口附属学校污水排水管布設に伴う試掘調査

この幼稚園・小学校部分の敷地は、1.5m前後の大きな段差二段をもって都合三面に造成されている。白石遺跡とされている小学校のグラウンドが最も低い面で、その東に小学校校舎の建ち並ぶ一段高い面がある。そして北がさらにもう一段高く、幼稚園の敷地やプールとなっている。58年度調査がグラウンド部分のみに限られたため、これらの段差は、敷地内の遺構の拡がり・遺跡立地等を推測する上で、大きな障害となっていた。以来、上二段部分で若干の立会調査を行なったが得られる知見に乏しく、上段部分の地下の状況の解明が急がれていた。また幼稚園・小学校部分の南約200mに位置する中学校部分でも、昭和60年度に初めて立会調査を試み、やはり周辺に遺構の存在が推察されていた。

昭和61年度に至り、山口附属学校全域において、公共下水道使用開始に伴い、污水排水管を新規埋設する工事が計画された。これを請けて当館運営委員会は、管の埋設予定路線内の埋蔵文化財の有無を確かめ、本格的調査の必要性を判断する資料を得るという目的で、試掘調査を行なうこととした。予定される管路の掘削総面積は、幼稚園・小学校部分で約900㎡、中学校部分で約450㎡である。調査は、配管工事の際特に深い掘削を必要とするマンホールの埋設予定カ所でもに行なうこととし、幼稚園・小学校部分で16カ所、中学校部分で8カ所を選定し、それぞれに2m×2mを基本規模とするトレンチを設定した。

調査方法は、構内の敷地造成の際の置土は重機を使用して除去し、以下、地山まで手掘りによる分層発掘を行なったのち、トレンチ端部をマンホール基底面まで深掘りして土層の観察を行なうものである。特に幼稚園・小学校部分では、園児・児童の安全確保の観点から、一日一トレンチの掘削・調査を完了し埋め戻すことを基本としたが、重機の搬入手続き上、置土の除去だけは数トレンチまとめて行なうこととなった。

アスファルト・カッター使用の都合上、予め小学校部分9月9日、中学校部分10月15日に調査区を設定した後、幼稚園で9月22日から27日まで、小学校で10月1日から15日まで、中学校は同22日から31日まで、人文学部考古学研究室の援助を得て調査を行なった。(杉原)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。以下、「58年度調査」と略称する。周辺の地理・歴史的環境はこちらをご覧いただきたい。
- 2) a 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校散水栓改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。
b 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属幼稚園環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。
c 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査」(本書第4章第4節)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。

第2節 教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査

1 層位・遺構

幼稚園部分で4カ所、小学校部分で12カ所の全16カ所にトレンチを設定し、調査順に通し番号を付した。調査総面積約57㎡。予定される管路掘削総面積の約6.3%にあたる。なお58年度調査時に小学校の体育館倉庫脇に設定した仮点（BM）は、標高32.757mである¹⁾ことを確認したので、今回調査との比較の際には参考とされたい。

<幼稚園部分>

幼稚園部分の敷地面は当構内で最も高くなっており、現地表面は標高ほぼ35.7m前後に造成されている。

第1トレンチ 幼稚園敷地のほぼ中央、1m×3mのトレンチ。西半分には既設の配管があり、土層の観察不能。東半部では、厚さ約80cmの造成時の置土・攪乱土の下に、弥

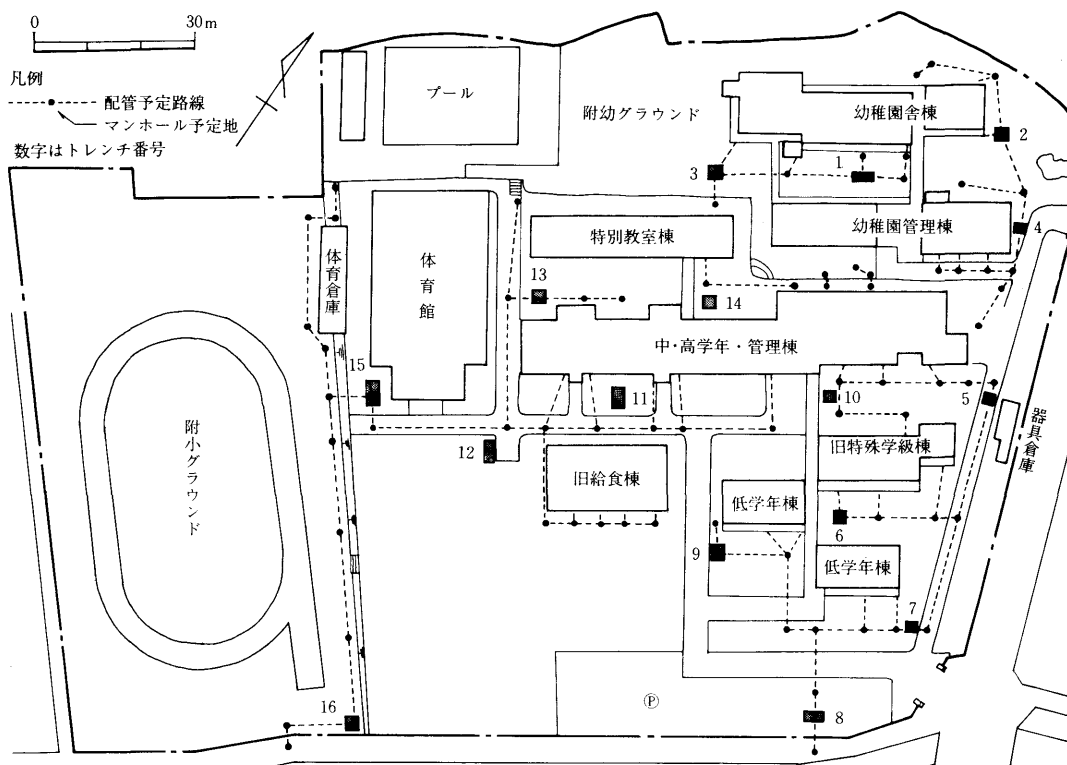


Fig. 5 トレンチ設定図

亀山構内教育学部山口附属学校污水排水管布設に伴う試掘調査

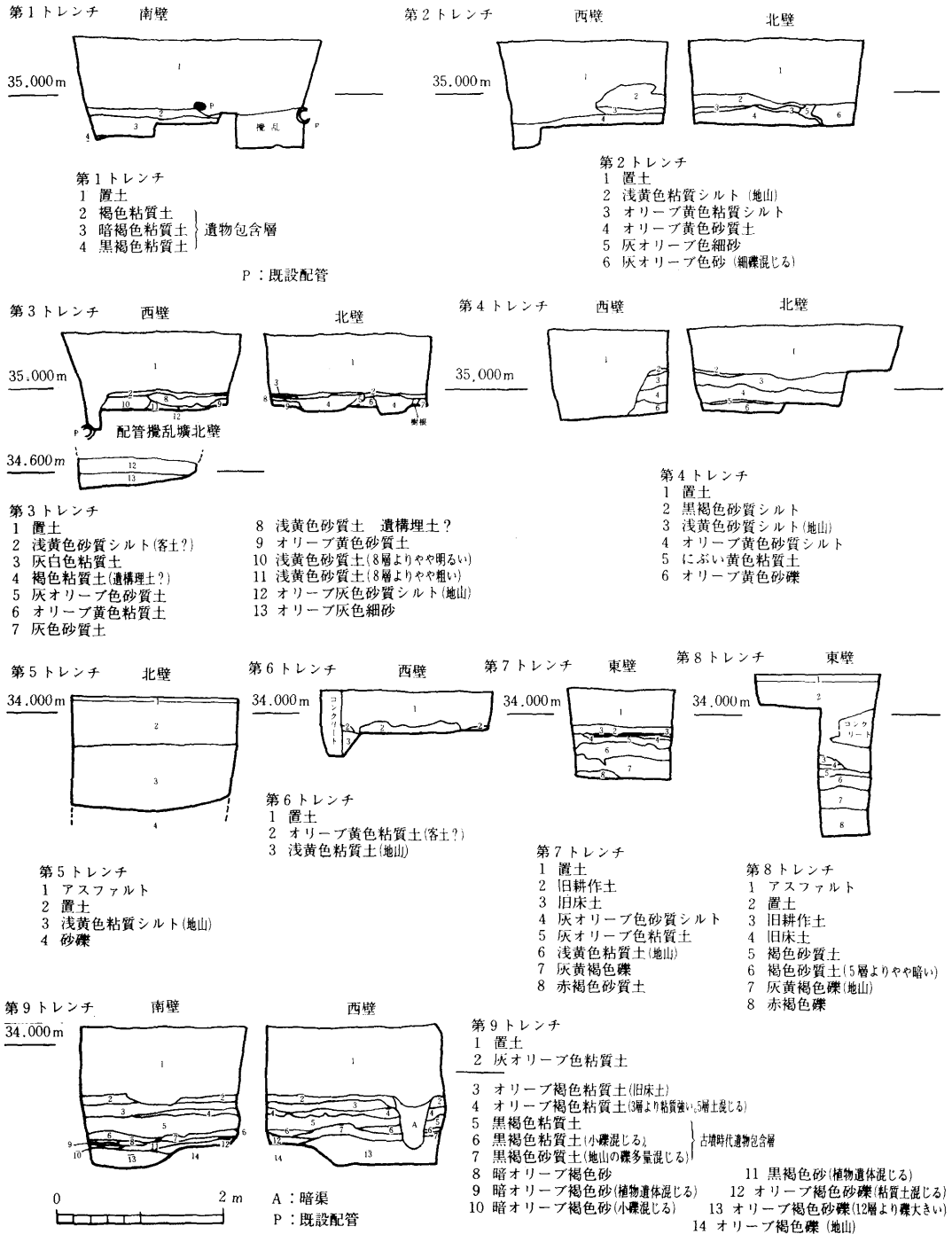
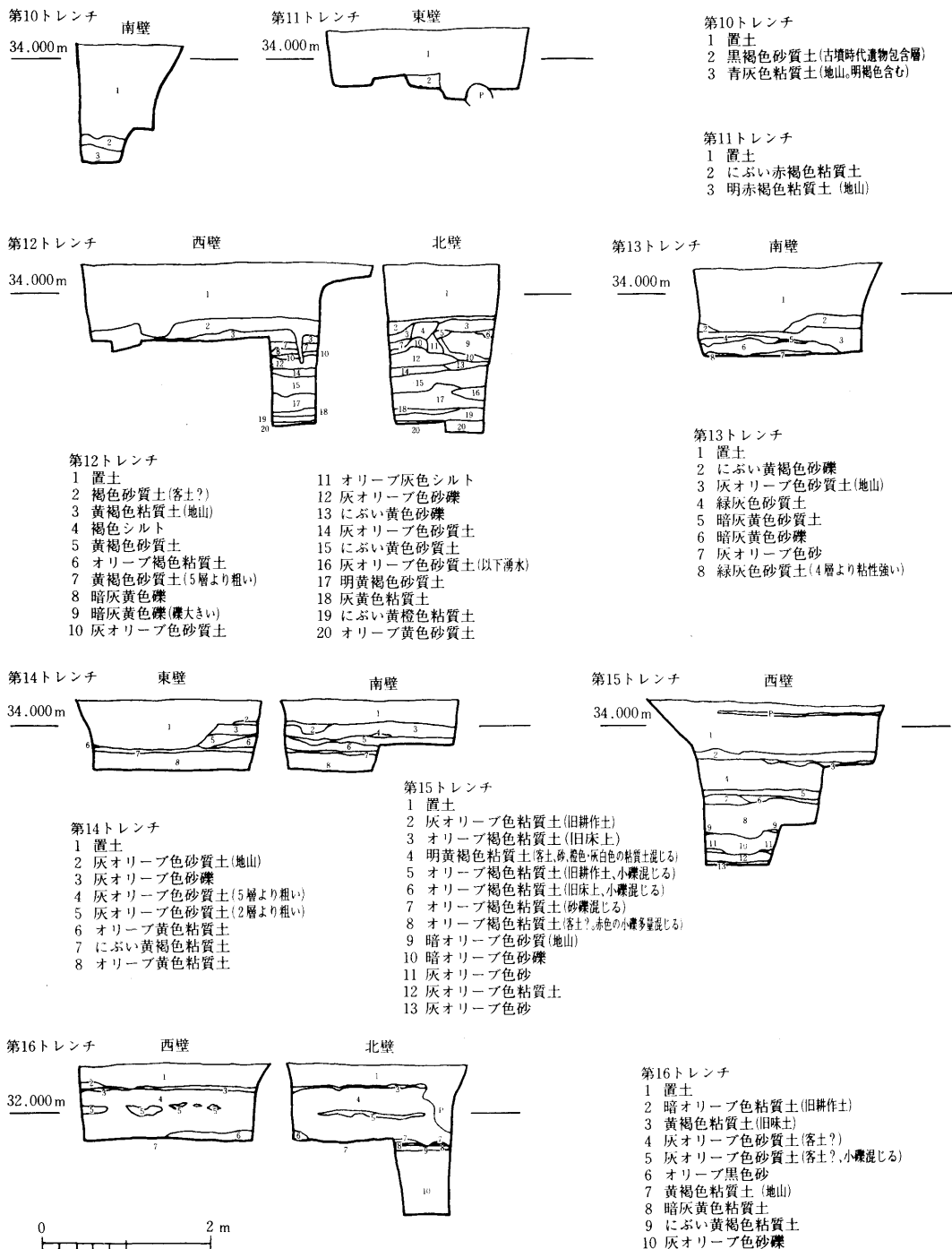


Fig. 6 土

教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査（層位・遺構）



層断面図

生土器を含む遺物包含層が3層残存していた。うち第4層：黒褐色砂質土は、その下面が東に向かって落ち込んでおり、土自体にもしまりがいいことから遺構埋土の可能性はあるが、今回の調査では拡がりを確認できなかった。掘削深度内では地山は検出されない。

遺物は、図化しえないが各包含層から弥生土器小片多数が出土したほか、配管の攪乱層から弥生土器・近代磁器が出土した。いずれもやや摩耗している。

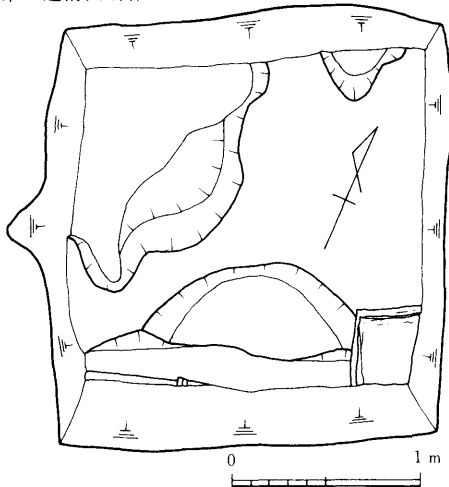
第2トレンチ 幼稚園敷地の北東隅、2 m×2 mのトレンチ。置土・攪乱土直下に、地山と思われる浅黄色粘質シルト層が部分的に残存するが、置土に混入したブロックかもしれない。第4層以下は激しく湧水する砂礫層となる。遺構・遺物は検出されない。

第3トレンチ 幼稚園グラウンドの南東隅、58年度調査のHトレンチの南東約25mの地点に設定した2 m×2 mのトレンチ。南端部はすでに配管がとおり、攪乱されていた。

二時期の遺構と思われるものを確認した。検出面は双方とも第2・3層下面であるが、この面で樹根が切れていることから、すでに遺構上部は後世の削平を受けているものと思われる。古い方の遺構は、第8・9層：浅黄色・オリーブ黄色の砂質土を埋土とするか、もしくはこのトレンチにみえる第5～11層がすべて遺構埋土の範囲内となる可能性がある。遺物はなく詳細は不明であり、第1トレンチ同様、遺構の拡がりの把握を含めた周辺の詳細な調査が望まれる。新しい方の遺構は、古い遺構の埋土を掘り込んでおり、第4層：褐色粘質土を埋土とする。この層からは室町時代の土師器坏口縁片が出土している。

なお、第2層から土師器・須恵器の小片、配管攪乱層から弥生土器・土師器・瓦質土器・

第1遺構面(新)



第2遺構面(古)

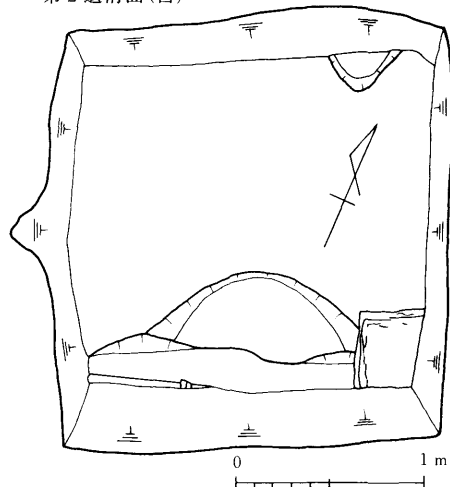


Fig. 7 第3トレンチ遺構配置図

不明鉄製品を検出した。

第4トレンチ 幼稚園管理棟の東、1.3m×2mのトレンチ。南半は構内造成により大きく削られている。北半では現地表下約50cmで薄い黒褐色砂質シルト層をはさんで浅黄色砂質シルトの地山に達し、以下、自然堆積層が続く。遺構・遺物は検出されない。

＜小学校部分＞

現地表面の標高が、34.1～34.5mに造成される校舎面に11ヵ所、一段低く、32.5～32.8mに造成されるグラウンド面で1ヵ所を選び、それぞれにトレンチを設定した。

第5トレンチ 小学校器具倉庫脇、2m×2mのトレンチ。置土・攪乱土直下、現地表から約60cmで、浅黄色粘質シルトの安定した地山となる。下部は次第に砂質度が強くなり、礫層に達して湧水する。遺構・遺物は検出されない。

第6トレンチ 旧特殊学級棟前、2m×2mのトレンチ。置土は現地表下40～50cmまでと比較的薄く、オリーブ黄色砂質土をはさんで浅黄色粘質土の地山に達するが、トレンチの対角線上に小学校設置以前の建造物の基礎が埋設されており、両層とも大きく攪乱を受ける。顕著な遺構・遺物は検出されない。

第7トレンチ 1.3m×1.5mのトレンチ。厚さ約50cmの置土直下に旧耕作土・床土が残存する。以下、自然堆積層2層をはさんで浅黄色粘質土の地山へと達し、角礫を含む礫層、そして赤褐色砂質土層と続く。第4層：灰オリーブ色砂質シルト層から土師器の小片が出土しているが、遺構は確認できなかった。

第8トレンチ 小学校正門横の駐車場南端、1.5m×3mのトレンチ。トレンチ内は過去の建造物に伴うと思われるコンクリート基礎が厚く堆積し、掘削できたのは南東端部のみである。置土は、多くの貝殻が混入し、厚さ1m～1.2mにおよぶ。その直下は北半部にのみ旧耕作土・床土が残存し、以下は自然堆積層が続く。第7層以下は湧水する。第7・8層は、第7トレンチの第7・8層にそれぞれ対応するものと思われるが、第7トレンチでみられた浅黄色粘質土の地山はここでは確認できず、遺構・遺物も検出されない。

第9トレンチ 低学年棟前、2m×2mのトレンチ。厚さ90cmの置土の直下に、一部攪乱を受けるが旧耕作土・床土が残存する。この耕作土上面を掘り込んで東西に走る暗渠が検出された。下面には小枝等を敷き、その上に礫（第14層の礫を含む）を詰めている。

床土下に第4層：オリーブ褐色粘質土をはさんで、黒褐色の遺物包含層が30cmあまりにわたって堆積する。この包含層は3層に分層され、最上層は厚さ15～25cmの粘質土層であるが、下層になるほど砂礫の混入が多くなる。3層の包含層の遺物は、一応各層ごとに分

けて取り上げたが、その段階では第6層を、トレンチ南東隅のみのブロックとして捉えていた。トレンチ西壁にみえる第6層は、後の断面観察により第7層から分離したもので、したがって西半分では第6層の遺物を第7層に含めて取り上げたことになる。

南壁にのみ確認される第8・9・10層は、礫と植物遺体の有無によって分層した。第11層は植物遺体を多量に含む。第12層以下は激しく湧水する礫層となる。地山とみられる第14層は、トレンチ南西隅で急に高くなる。

包含層からは古墳時代の土師器が多量に出土し、他に弥生土器・歴史時代土師器・青磁、黒曜石剥片、不明鉄製品の混入がみられる。暗渠埋土からは同様の土師器のほかに弥生土器・須恵器・瓦質土器が出土しており、第4層でも同様の土師器と須恵器片が出土。

第10トレンチ 1.2m×1.5mのトレンチ。約1.1mの厚い置土の直下に第2層：黒褐色砂質土の遺物包含層が堆積する。その下は、明褐色土を含む青灰色粘質土の不安定な地山で、湧水する。第2層からは5世紀代の土師器が出土しているが、量的には少ない。

第11トレンチ 1.5m×3.1mのトレンチ。トレンチ南半は配管の埋設、北端は校舎建築時の掘削により、それぞれすでに大きく攪乱されており、土層の観察不能。わずかにトレンチ中央部で、厚さ50cmの置土直下に、にぶい赤褐色粘質土の堆積が残っており、この層から土師器甕の破片が出土した。その下はすぐに明赤褐色粘質土の地山となる。

第12トレンチ 旧給食棟横、1.5m×3mのトレンチ。コンクリートの基礎やレンガを含む厚さ60～70cmの置土の下に、しまりのない褐色粘質土をはさんで、黄褐色粘質土の地山が検出される。褐色粘質土は、客土の可能性もある。南端部で、地山を掘り込んだ不明瞭なピットを検出したが、遺構かどうかは不明。深掘りの結果、第16層以下湧水。土師器甕の破片と格子タタキをもつ土師質土器片が検出されているが、出土層位は不明。

第13トレンチ 2m×2mのトレンチ。北半部には旧建造物のコンクリート基礎があるため掘削不能。南半部の観察では、厚さ50～60cmの置土以下はすぐに砂礫と砂質土との互層になるが、顕著な湧水は認められず、第14トレンチにみられる黄色系統の粘質土が、さらに下部に堆積するものと思われる。遺構・遺物なし。

第14トレンチ 第13トレンチの東約30m、2m×2mのトレンチ。北半部は大きく削られているが、置土直下は砂質土・砂礫の互層となる第13トレンチ同様の層位である。しかしそれ以下に、黄色系統の比較的安定した粘質土が堆積することから、この砂礫層は、時期は明らかでないが付近の河川等が氾濫した際運ばれてきたものかと思われる。置土の厚さも30cm足らずであり、もともとの地形が第13トレンチより高かったことが窺える。遺

構・遺物は認められない。

第15トレンチ 体育館横、グラウンドとの高低差が約1.5mある大きな段差の上端に設定した、0.8m×2mのトレンチ。厚さ約60cmの構内造成時の置土の下には、約35cmの厚い客土をはさんで上下にそれぞれ旧耕作土・床土がある。その下の第7・8層もさら客土の可能性はある。第9層以下が地山で、湧水する。遺構・遺物は認められない。

第16トレンチ 小学校校舎面から一段落ちたグラウンド南東隅に設定した2m×2mのトレンチ。58年度調査で竈を付設した竪穴住居を検出したGトレンチは、この西約25mの地点に位置し、周辺での遺構ないしは遺物包含層の存在を把握する必要があった。

約20cmの薄い置土の下に旧耕作土・床土が残存している。その下に、小礫をブロック状に含み厚さ約60cmにわたって厚く堆積している灰オリーブ色砂質土（客土の可能性あり）をはさんで、黄褐色粘質土の地山となる。地山直上で、有機質の黒褐色粘質土ブロックがごくわずかと、オリーブ黒色砂のブロックが観察されたが、遺構・遺物はない。

西端の深掘りの結果、この地山自体もわずかに5cmの厚さしか残っておらず、グラウンド南西隅で行なった「電柱移設に伴う立会調査」の所見ではこの地山が1.5mにもおよぶ厚さをもっていたことから、グラウンドの東寄りの段の真下あたりは大幅に削平され、遺構があったとしてもすでに消失しているものとみられる。以下、薄い粘質土が2層続き、その下には湧水する灰オリーブ色砂礫が少なくとも80cm堆積する。 (杉原)

2 遺物

遺物は、第1・3・7・9・10・11・12トレンチでそれぞれ出土しているが、第3・7・11・12トレンチ出土のものは小片のため図化しえない。

第1トレンチ出土遺物 (Fig. 8, PL. 8)

各包含層から弥生土器片多数、配管の攪乱墳から弥生土器・近代磁器が出土したが、ほとんどが摩耗した小片で、器形を知りうるものは少ない。

図示したのは配管の攪乱墳から出土した弥生土器壺の底部で、厚く大きい平底になるものと思われ、弥生時代前期に遡る可能性をもつものである。

第9トレンチ出土遺物 (Fig. 9~12, PL. 8・9)

第5~7層（遺物包含層）から多量に出土した。また、第4層および旧耕作土を掘り込んだ暗渠からの出土遺物もある。

暗渠出土遺物 (Fig. 9)



Fig. 8 第1トレンチ出土遺物実測図

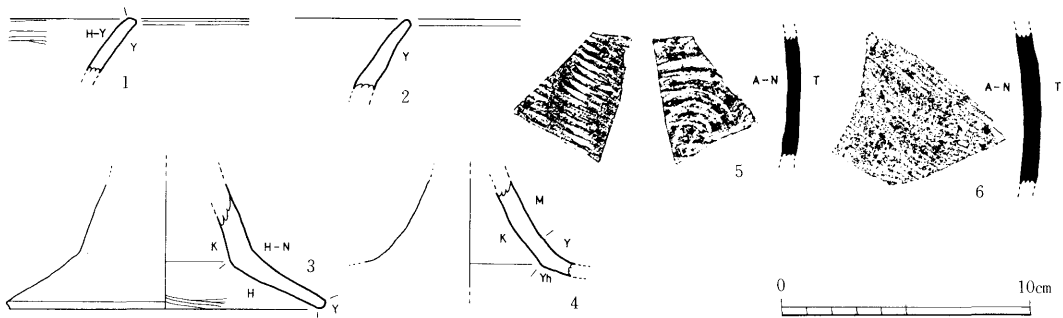


Fig. 9 第9トレンチ暗渠出土遺物実測図

主体は古墳時代の土師器で、他に弥生土器・須恵器・瓦質土器が出土している。

1～4は土師器。1・2は甕口縁部で、1は口縁上面にはほぼ水平な面をもち、端部を外につまみ出すもの。2は端部に小さな面をもち、口縁中位が膨らむもの。甕には他にタタキを施す破片がある。3・4は高坏の脚部。3は裾端部に面をつくるもので内外面とも刷毛目がややナデ残っている。4は裾部を欠損し、外面は脚柱部のみをヘラミガキする。

5・6は須恵器片。ともに外面は平行タタキであるが、内面は同心円の当て具痕の上を5は後にややナデしており、6はほとんど当て具痕が残らないくらいにナデ消している。6はタタキが細かく、外面には自然釉の付着がみられる。

これらの遺物は、本来遺物包含層に含まれていたものが暗渠掘削によって遺物包含層から遊離し、暗渠内部を被覆する際に混入したものと思われる。

第4層出土遺物 (Fig. 10)

土師器・須恵器片が若干出土している。弥生土器かと思われるものもある。

図は、須恵器の破片で、器形はわからない。外面には平行タタキの後、一部にカキ目が見える。内面は丁寧なナデが施され、当て具の痕跡は全く残らない。 (杉原)

第5・6・7層出土遺物 (Fig. 11・12)

遺物包含層は3層に分層できるが、層位の項で述べたとおり、遺物取り上げの段階で第6・7層が混合しており、それに加えて第5層と第6・7層との遺物が接合するため、分層はしたものの、ここでは一括して取り扱うことにする。上層には摩耗した小片が多く、下層になるに従って遺存状態がよくなるが、全体の器形が窺えるほどの大きさの破片はない。



Fig. 10 第9トレンチ
第4層出土遺物実測図

古墳時代の土師器が圧倒的に多く、他に弥生土器・歴史時代土師器・青磁片各1点、黒曜石の剝片2点、不明鉄製品1点がある。

1～27は甕で大半は口縁部の資料である。直線的に開くもの（5・7・8・13・16・21）、内彎して開くもの（6・9）、複合口縁になるもの（19・20）などがあるが、外彎しながら開くものが多い。直線的に開くものには、口縁端部に面をもつもの（5・8）、端部が肥厚ぎみに強く屈曲するもの（21）、端部が先尖りのもの（16）、丸くおさめるもの（13）などがある。また、端部内面に面をもつもの（7）もある。外彎して開くものには、短い口縁部をもち端部付近でさらに外反するもの（17）や口縁端部が肥厚し、面をもつもの（2～4）、丸くおわるもの（11）などがある。また、端部が尖りぎみに丸く終わるもの（10・15・18）のなかには15のように口縁端部直下の外面に一条の沈線が巡るものがある。内彎して開くものは、口縁端部に水平もしくは水平に近い面をもつ。口縁端部付近でわずかに外反するもの（6）や端部が肥厚するもの（40）がある。58・59は複合口縁をもつものであるが、口頸部の屈曲は弱く、外面をわずかに膨らませただけのもので屈曲部を表現する。いずれも口縁端部は尖る。22・23のように外面にタタキを残す資料はほとんどなく、大半は刷毛目仕上げである。5・6・8・9・13～15など約半数資料の外面に煤が付着する。24～27は底部で、25は円盤状の突出した底部をもつ。内面は粗いナデ仕上げで、側面には指圧による整形痕が顕著である。24は時期的に遡るものである。内外面はいずれも横ナデで、刷毛目の残るものもある。

28～34は壺。28～32は小型丸底壺と思われ、口縁部が直線的に直立もしくはそれに近く開くもの（28・29・31・32）が多い。口縁端部は尖りぎみもしくは丸くおさめる。30は口縁部の中位で内彎して立ち上がる。内外面とも横ナデであるが、28・29は横刷毛ののち横ナデおよびナデを施す。33・34は時期的に遡るものである。

35～46は高坏。35～39は坏部で、やや深いものが多いものと思われる。反転部の稜は極めて不明瞭で、下半部および上半部とも内彎して開き、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸いもの（35・37）と尖るもの（36）がある。40～46は脚部。脚柱部は坏部との接合部付近から開く（40～42）。脚裾部は屈曲せずそのまま端部にいたり、丸くおわるもの（43）と脚裾部で屈曲するもの（44・45）などがある。45は水平に近く屈曲する。44～46とも端部は尖る。脚柱部はナデ、他は横ナデ仕上げが多い。

47～52は碗。47～51は内彎して開く体部をもち、47・48は口縁端部が短く外反する。横ナデもしくはナデ仕上げで、50は外面ヘラミガキを施す。

53・54は剥片でいずれも上端部を欠損し、打点、打面は残存していない。54は正面下半部、右半部に自然面を残す縦長剥片で、ヒンジフラクチャーをおこしている。

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

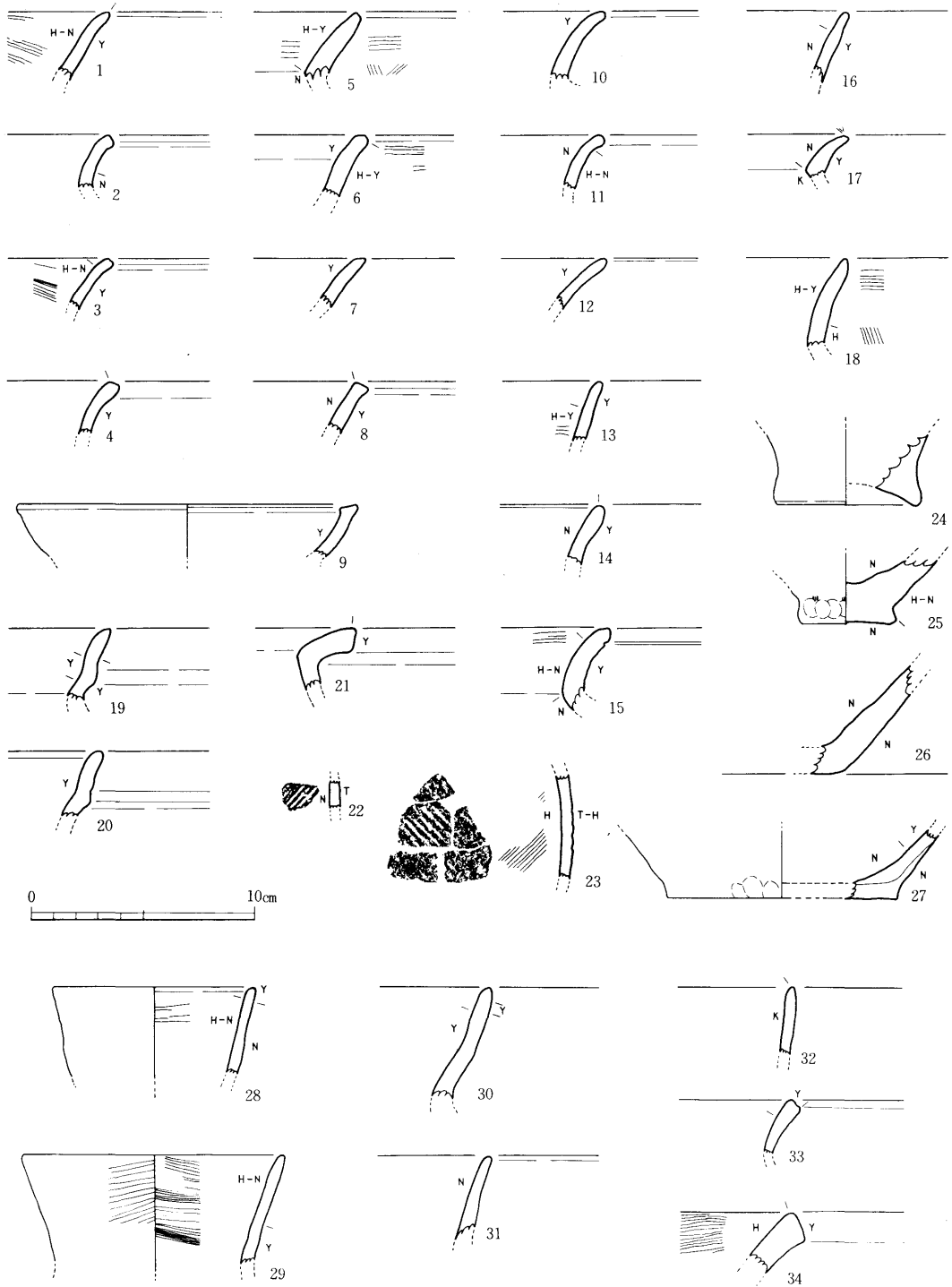


Fig. 11 第5トレンチ第5・6・7層出土遺物実測図(1)

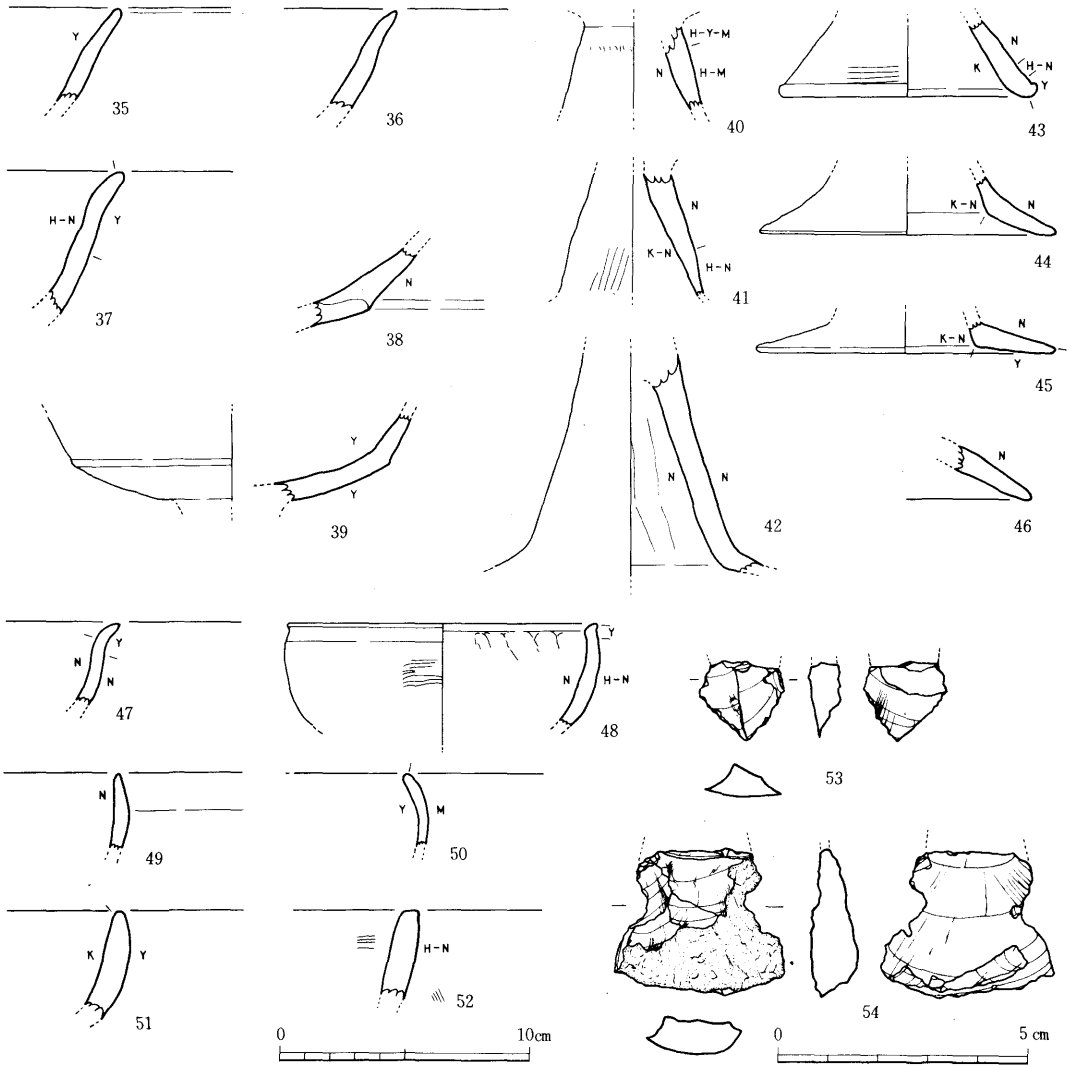


Fig. 12 第5トレンチ第5・6・7層出土遺物実測図（2）

第10トレンチ出土遺物（Fig. 13, PL. 9）

1は甕口縁部で、端部にしっかりした面をつくる。
 2は甕肩部で、頸の粘土接合痕を未調整のまま残す。
 3は小形器台の坏部。脚部との接合は貼り付け式で貫通しない。口縁外面には赤色顔料の痕跡がある。
 遺物はすべて第2層から出土。5世紀代を主とする土師器であるが、量的には少ない。（河村）

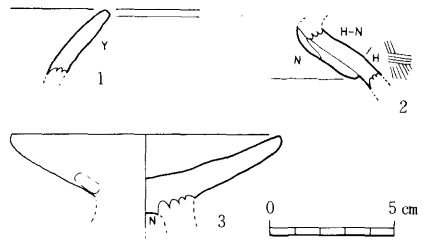


Fig. 13 第10トレンチ出土遺物実測図

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

Tab. 2 出土遺物観察表

法量 () は現存値

No	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考	
第1トレンチ (Fig.8)								
一	弥生土器 壺	—	(2.1)	外面 } ぶい黄橙色 (10YR7/3) 内面 }	良好	2mm以下の石英を 多量に含む	良好	
第9トレンチ暗渠 (Fig.9)								
1	土師器 甕	—	(2.1)	外面- ぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面- ぶい橙色 (7.5YR6/4)	良好	1mm程度の石英を 含む	良好	
2	土師器 甕	—	(2.7)	外面- ぶい橙色 (7.5YR6/4) 内面- ぶい橙色 (10YR7/3)	良好	1mm程度の石英を 含む	良好	
3	土師器 高坏	*12.4	(5.0)	外面 } ぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面 }	良好	ほとんど不純物を 含まない	やや 甘い	
4	土師器 高坏	—	(3.8)	外面 } 浅黄橙色 (10YR8/3) 内面 }	精良		きわめて 良好	
5	須恵器	—	(4.8)	外面- 緑灰色 (10GY6/1) 内面- 灰色 (N5/0)	良好	1mm以下の石英・ 長石を含む	良好	
6	須恵器	—	(6.1)	外面- 明青灰色 (5B7/1) 内面- 灰色 (N6/0)	精良	不純物は含まない	きわめて 良好	
第9トレンチ第4層 (Fig.10)								
一	須恵器	—	(1.5)	外面 } 灰色 (N6/0) 内面 }	良好	1mm程度の石英を 含む	良好	
第9トレンチ第5・6・7層 (Fig.11・12)								
1	土師器 甕	—	(2.8)	外面 } ぶい黄橙色 (10YR7/3) 内面 }	精良		きわめて 良好	
2	土師器 甕	—	(2.3)	外面- ぶい黄褐色 (10YR5/3) 内面- 灰黄褐色 (10YR5/2)	精良	1mm以下の石英・ 長石を含む	良好	
3	土師器 甕	—	(2.2)	外面- ぶい橙色 (7.5YR7/3) 内面- 灰黄褐色 (10YR6/2)	普通	2mm程度の石英を 含む	良好	
4	土師器 甕	—	(2.3)	外面- 灰黄褐色 (10YR6/2) 内面- ぶい黄褐色 (10YR6/3)	粗い	4mm以下の石英を 含む	きわめて 良好	
5	土師器 甕	—	(3.0)	外面- 灰黄色 (2.5Y6/2) 内面- ぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好	1mm以下の長石・ 2mm程度の銀色鉱 物を含む	良好	外面煤付着
6	土師器 甕	—	(2.7)	外面- ぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面- ぶい橙色 (7.5YR7/3)	普通	2mm以下の石英を 含む	きわめて 良好	外面煤付着
7	土師器 甕	—	(2.1)	外面 } 淡黄色 (2.5Y8/3) 内面 }	良好	1.5mm以下の砂粒 を少量含む	きわめて 良好	
8	土師器 甕	—	(2.1)	外面- ぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面- ぶい橙色 (7.5YR7/3)	普通	2mm以下の石英を 含む	良好	外面煤付着
9	土師器 甕	15.2	(2.2)	外面- ぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面- ぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	1mm程度の石英・ 長石の砂粒含む	良好	外面煤付着
10	土師器 甕	—	(3.0)	外面 } ぶい黄褐色 (10YR7/2) 内面 }	良好	1mm以下の石英を 多く含む	きわめて 良好	
11	土師器 甕	—	(2.4)	外面 } ぶい橙色 (5YR6/3) 内面 }	精良	3mm以下の石英を 若干含む	良好	
12	土師器 甕	—	(2.2)	外面 } ぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面 }	普通	1mm以下の石英を 含む	良好	
13	土師器 甕	—	(2.6)	外面- ぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面- 明赤褐色 (2.5YR5/6)	普通	2mm程度の石英を 含む	良好	外面煤付着
14	土師器 甕	—	(2.5)	外面 } 褐色 (7.5YR7/6) 内面 }	普通	2mm以下の石英を 含む	きわめて 良好	外面煤付着
15	土師器 甕	—	(3.6)	外面- 黒色 (10YR1.7/1) 内面- 褐色 (7.5YR5/1)	良好	1mm程度の石英を 含む	良好	外面煤付着
16	土師器 甕	—	(3.0)	外面- ぶい褐色 (5YR7/4) 内面- ぶい褐色 (5YR6/4)	良好	2mm以下の石英を 若干含む	きわめて 良好	
17	土師器 甕	—	(1.9)	外面 } ぶい黄褐色 (10YR7/3) 内面 }	良好	1mm以下の砂粒 少量含む	良好	外面煤付着
18	土師器 甕	—	(3.9)	外面- ぶい黄褐色 (10YR7/3) 内面- 浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	1mm程度の石英・ 1mm程度の赤色 鉱物(チャート風)含む	きわめて 良好	外面煤付着
19	土師器 甕	—	(3.2)	外面- 淡黄色 (2.5Y8/3) 内面- ぶい黄褐色 (10YR7/2)	やや 粗い	2mm以下の石英を 含む	普通	
20	土師器 甕	—	(2.9)	外面 } ぶい褐色 (7.5YR6/3) 内面 }	やや 粗い	2mm以下の石英・ 1mm以下の長石を含む	きわめて 良好	
21	土師器 甕	—	(2.7)	外面 } 浅黄褐色 (10YR8/3) 内面 }	良好	1mm程度の石英・ 赤色の鉱物を含む	良好	
22	土師器 甕	—	(1.3)	外面- 灰黄褐色 (10YR6/2) 内面- ぶい黄褐色 (10YR7/2)	普通	2mm程度の石英を 含む	良好	外面煤付着
23	土師器 甕	—	(4.6)	外面 } ぶい黄褐色 (10YR7/3) 内面 }	普通	2mm以下の石英を 含む	やや 甘い	外面煤付着

教育学部附属幼稚園・山口小学校部分の調査（遺物）

24	弥生土器 甕	*5.2	(3.1)	外面-灰白色(10YR8/1) 内面-灰白色(10YR8/2)	良好	2mm程度の砂粒を若干含む	良好	
25	土師器 甕	*3.9	(2.9)	外面-灰白色(10YR8/2) 内面-浅黄褐色(10YR8/3)	良好	1mm程度の石英・長石の砂粒含む	きわめて良好	
26	土師器 甕	-	(4.9)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-灰色(7.5Y4/1)	普通	2mm以下の石英・赤色の礫を含む	良好	
27	土師器	*10.0	(3.1)	外面-にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面-にぶい橙色(7.5YR6/4)	精良	石英・長石等の砂粒を含む	良好	
28	土師器 壺	8.9	(3.8)	外面-灰黄褐色(10YR5/2) 内面-灰黄褐色(10YR6/2)	精良	1mm以下の石英を若干含む	良好	
29	土師器 壺	11.5	(4.8)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	1mm以下の石英を若干含む	良好	
30	土師器 壺	-	(4.9)	外面-橙色(7.5YR6/6) 内面-明赤褐色(5YR5/6)	良好	1mm以下の石英を含む	良好	
31	土師器 壺	-	(3.6)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/2) 内面-	良好	2mm以下の石英を含む	きわめて良好	
32	土師器 壺	-	(3.0)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/4) 内面-	普通	1mm以下の長石他含む	やや甘い	
33	土師器 壺	-	(2.4)	外面-黄灰色(2.5Y5/1) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	1mm以下の石英・長石・礫を含む	良好	
34	土師器 壺	-	(2.7)	外面-にぶい黄褐色(10YR6/3) 内面-	やや粗い	3mm以下の石英他かなり含む	良好	
35	土師器 高坏	-	(3.7)	外面-橙色(5YR7/6) 内面-	普通	1mm程度の石英を若干含む	やや甘い	
36	土師器 高坏	-	(3.9)	外面-橙色(7.5YR7/6) 内面-	良好	1mm程度の石英を含む	良好	
37	土師器 高坏	-	(5.7)	外面-浅黄褐色(10YR8/3) 内面-橙色(7.5YR7/6)	良好	細砂含む	やや甘い	外面黒斑あり
38	土師器 高坏	-	(1.9)	外面-にぶい橙色(7.5YR7/3) 内面-	良好	2mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	普通	
39	土師器 高坏	-	(3.4)	外面-にぶい橙色(5YR7/3) 内面-にぶい橙色(5YR7/4)	良好		やや甘い	
40	土師器 高坏	-	(3.4)	外面-橙色(7.5YR7/6) 内面-	精良		やや甘い	
41	土師器 高坏	-	(4.8)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/4) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	2mm程度の石英を含む	きわめて良好	
42	土師器 高坏	-	(8.7)	外面-灰黄色(2.5Y6/2) 内面-灰色(7.5Y5/1)	良好	1mm程度の石英・長石を含む	きわめて良好	
43	土師器 高坏	*9.9	(3.0)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-	良好	1mm以下の石英を含む	きわめて良好	
44	土師器 高坏	*11.1	(2.3)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/4) 内面-にぶい黄褐色(10YR6/3)	精良		良好	
45	土師器 高坏	*11.5	(1.2)	外面-橙色(5YR7/6) 内面-	精良	細粒含む	きわめて良好	
46	土師器 高坏	-	(2.1)	外面-にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面-	普通	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
47	土師器 鉢	-	(3.3)	外面-にぶい褐色(7.5YR5/4) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/3)	精良	不純物はほとんど含まない	良好	外面煤付着
48	土師器 鉢	12.3	(4.0)	外面-褐色(7.5YR5/1) 内面-	精良	石英・長石他の砂粒を含む	良好	
49	土師器 鉢	-	(3.0)	外面-灰色(5Y4/1) 内面-	良好	1mm以下の長石を含む	きわめて良好	
50	土師器 鉢	-	(2.9)	外面-にぶい橙色(5YR7/3) 内面-にぶい橙色(5YR7/4)	精良		やや甘い	
51	土師器 鉢	-	(4.2)	外面-灰黄色(2.5Y6/2) 内面-灰黄色(2.5Y7/2)	精良	1mm以下の石英・長石を若干含む	良好	
52	土師器 鉢	-	(3.3)	外面-黄灰色(2.5Y6/1) 内面-灰色(7.5Y5/1)	普通	2mm以下の石英を含む	良好	
第10トレンチ (Fig.13)								
1	土師器 甕	-	(2.6)	外面-橙色(5YR6/6) 内面-浅黄褐色(10YR8/3)	良好	1mm程度の石英を若干含む	普通	
2	土師器 甕	-	(3.4)	外面-にぶい橙色(7.5YR7/4) 内面-にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	1mm程度の石英・1mm以下の長石を各々若干含む	良好	
3	土師器 器台	10.7	(3.2)	外面-にぶい黄褐色(10YR7/3) 内面-にぶい黄褐色(10YR7/2)	普通	2mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	良好	外面丹塗
No	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考	
第9トレンチ第5・6・7層 (Fig.12)								
53	剥片	(1.6)	1.7	0.6	(1.2)	黒曜石		
54	剥片	(2.8)	3.4	0.9	(7.1)	黒曜石		

3 小 結

(1) 出土遺物と検出遺構について

第1・3・7・9・10～12各トレンチで遺物が出土した。各トレンチとも破片ばかりであるが、特に第9トレンチでは甕、壺、高坏、埴など器形のわかるほぼ同時期の資料が含まれており良好な資料である。なお、出土遺物のなかには磨滅の少ないものが含まれており、比較的近傍から流入したものと考えられる。

甕は、口縁部が外彎して開くものが多いが、内彎して開く口縁部をもち、端部がやや肥厚して水平もしくは水平に近い面をもつもの(9)がある。端部に面をもつものは他に2点ある。(6・7)。また、口頸部の退化現象によって、口頸部の屈曲が極めて弱く、外面を突帯状にわずかに膨らませただけの短い複合口縁をもつもの(19・20)がある。胴部外面にタタキがみられるものは極めて少なく、外面は刷毛ないしナデ仕上げで、内面はヘラケズリを行なうものが多い。前者は外来要素の強い布留型³⁾の甕で、下東遺跡 KP-11、第Ⅳ地区 KSP、西遺跡第2号溝等⁴⁾で出土例が知られ、布留式土器の新しい段階に位置づけられよう。後者は在地系の甕で、周防部に特徴的な複合口縁をもつ甕の終末期のものと考えられ、本学の吉田構内遺跡保存地区第12・13号堅穴住居跡に類品がみられる。現在までのところ、県内では両者の良好な共伴資料は得られていないが、下東遺跡 KP-11出土例のように両者の折衷形態と考えられるものがあり、本校内の調査によって畿内布留式土器の流入、変化の過程と、それに合呼応する複合口縁をもつ甕の退化、消長の過程が山口盆地内で確認される日は近い。

壺は、口縁部が直線もしくは内彎して長くのびる小型丸底壺と考えられるものが多いが、口縁部と体部の大きさの比率、体部の器面調整は明らかでない。

高坏は、坏部の深さ、上半部と下半部の比率は明らかでないが、明瞭な稜をもたず、下半部は内彎して立ち上がる。上半部は緩やかに開くものと思われ、口縁端部はわずかに外反する。脚柱部は坏部との接合部付近から開き、やや膨らみぎみのものと直線的に下方に開くものがある。脚裾部はそのまま開くものと屈曲するものがある。

埴は、体部が内彎して開くもので、口縁端部がわずかに外反するものもある。48は西遺跡第2号溝出土例のように脚台をもつものかもしれない。

なお、第10トレンチからは小型の丸底壺、鉢、器台の小型三種土器のうち直線的に伸びる浅い皿状の受部をもつ器台が出土している。

以上のように、第9トレンチ第5～7層出土遺物は一部にやや遡るものもあるが、全般

的に畿内布留式土器の新段階に位置づけられ、5世紀前半頃の時期を与えることができよう。なお、この段階には畿内の一部を除いて初期須恵器が出現する時期にあたるが、今回の調査では出土していない。

明確な遺構は今回の調査では検出していない。しかし、幼稚園敷地部分の第3トレンチでは、遺構と思われる新旧二時期の掘り越みを確認した。切り合い関係にあり、新しい掘り込みから室町時代の土師器が出土している。また、同第1トレンチでは遺物包含層が不規則に落ち込み、土自体にもしまりがなくことから遺構の存在を予想させるが、調査面積が狭いため詳細は不明で、今後の調査を待って結論を出したい。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

昭和58年度の調査では、溝状遺構、竪穴住居跡および遺物包含層を検出した。上述したように、校舎敷地部分に比べ一段低くなっている小学校のグラウンドを中心に実施したもので、その造成状況から校舎敷地部分では遺構、遺物包含層が過去に存在していたとしてもすでに削平されているものと考えられていた。今回の調査範囲は部分的ではあったが、その予想を大きく覆す結果となった。

土層観察が断片的であるため、はっきりした旧地形等の全体像はつかみかねるが、幼稚園敷地部分の第2トレンチでは砂礫、小学校敷地部分第12・13・14トレンチでは砂礫と砂質土の互層となる堆積が認められた。昭和58年度に調査した幼稚園敷地部分の第3トレンチ北西約25mに位置するHトレンチでも砂礫の堆積が確認されており、幼稚園・小学校敷地部分の東端および中央部には北から南に貫流すると思われる河川が存在する可能性がある。今回の調査では遺物が出土しておらず、時期は定かでないが、今後、その規模、時期、流路方向を把握する必要がある。

また、小学校の校舎敷地部分はほぼ平坦に造成されているが、第8・9・15トレンチでは周辺の各トレンチに比較して地山がかなり下位に存在し、埋め土も特に厚く堆積している。小学校の南東端部およびグラウンドとの段差付近の地域は、丘陵の尾根がそれぞれ南に下降していくあたりに位置しているものと考えられ、布留式土器の終末期の遺物が出土した第9トレンチの遺物包含層、昭和58年度の調査で認められた溝状遺構はこうした谷あいでも検出されたものと推察される。

遺物は、前回実施したグラウンド部分の調査で、溝状遺構から庄内式土器の新段階の遺物が多量に出土しているが、今回の調査ではその段階まで遡る資料はない。また、布留式

併行の竪穴住居跡1棟も検出されているが、広義の布留式土器の範疇で取り扱っている。第9トレンチの一括土器群中には、竪穴住居跡出土遺物と同形態のものが含まれていることから、小学校敷地部分には庄内式新段階および布留式新段階の、少なくとも新旧二時期の遺物包含層もしくは遺構が存在する可能性が提起された。

今回の調査は幼稚園・小学校敷地内全面について実施したものではないが、本構内における今後の施設、環境整備に関する有意義な資料を提供した。とくに、遺物包含層ないしは遺構と考えられる掘り込みが検出されている第1・3トレンチ周辺の幼稚園中央部付近、第9・10トレンチ周辺の小学校南東部では遺物包含層の分布範囲の把握を含めた工事に先立つ事前の調査が必要である。また、小学校グラウンドで認められた竪穴住居跡の検出面と同様な、安定した地山も数箇所のトレンチで確認されていることから、遺構が存在する可能性は十分考えられ、立会調査等によってその存否を確認する必要がある。(河村)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。この報告当時は、標高を、このBMを基準とした相対値であらわしていた。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校電柱移設に伴う立会調査」(本書第4章第4節、1987年)。
- 3) 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「下東遺跡」(『下東遺跡・荻峠遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第30集、1975年)。
- 4) 山口県教育委員会「西遺跡」(山口県埋蔵文化財調査報告第21集、1986年)。

第3節 教育学部附属山口中学校部分の調査

1 層位・遺構

全8ヵ所にトレンチを設定。調査順にトレンチ番号をふった。調査総面積は約20㎡で、予定される管路掘削総面積の約5.7%にあたる。附属山口中学校の敷地は、標高ほぼ28.2～28.4mに造成されている。北端のプール部分と東端のテニスコート部分がやや高くなり、西の敷地外は、脇の市道が一段低く、白石小学校がさらにもう一段低くなっている。

第1トレンチ 0.8m×2.5mのトレンチ。厚さ40cmの置土直下がオリーブ灰色シルトの地山で、以下、同色系統の砂・粘質土の互層となる。ただし、トレンチ東半の深掘り部分で地山を削り込んだような落ち込みがみられ、そこに黄系統の粘質土が3層堆積し、上に灰オリーブの砂礫がかぶさっている。断言はできないが、河川跡の埋土の可能性はある。遺物は検出されない。湧水するが、どの層からかは確認していない。

第2トレンチ 第1トレンチの西約15m、1m×2.5mのトレンチ。厚さ約40cmの置土直下の地山：灰オリーブ色シルトは、第1トレンチ第7層に対応すると思われるが、以下は黄褐色砂礫の単一層となり、第1トレンチと異なる。遺構・遺物は検出されない。

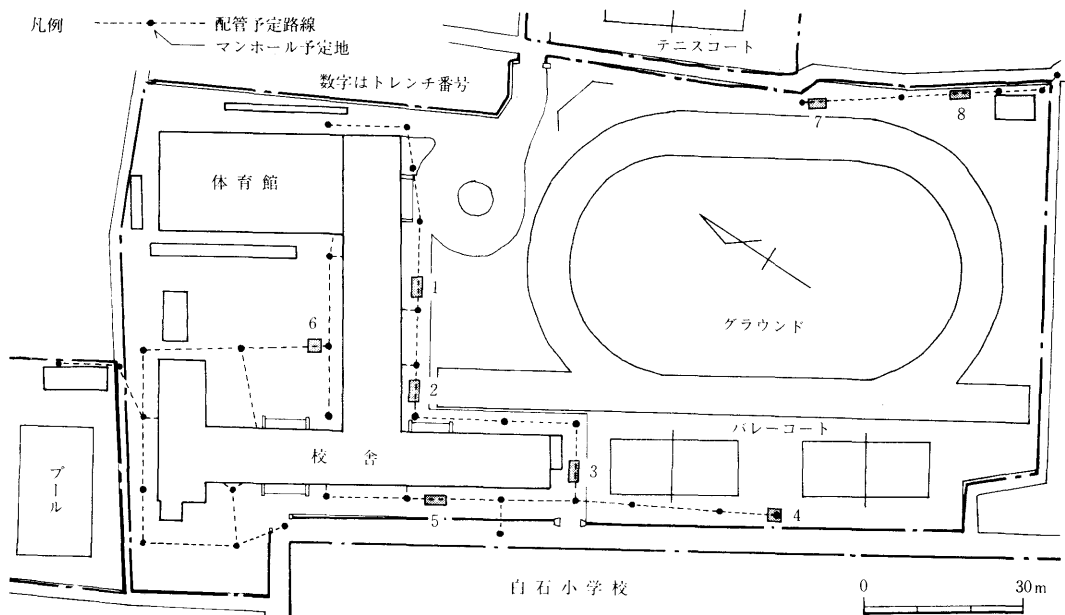


Fig. 14 トレンチ設定図

第3トレンチ 1m×2.5mを設定したが、調査は東半部にとどめた。北端部は既設の配管埋設時に攪乱を受けている。厚さ70cmの置土の下に旧耕作土が残存、その直下に3層の遺物包含層が厚さ70～80cmにわたって堆積し、湧水する砂礫層の地山にいたる。

遺物包含層は、自然木を含む湿気の高い粘質土で、河川の氾濫等に起因する二次堆積層と思われるため遺物は一括して取り上げた。石鏃2本のほか、弥生土器・土師器（中世中心）・須恵器・瓦質土器・陶器・磁器がある。遺構は検出されなかった。

第4トレンチ グラウンドの西端、1m×2.5mのトレンチ。30cm前後の薄い置土の下に2層の客土があり、第4層：暗緑灰色粘土の地山にいたる。第4層以下は湧水し、遺構は検出されない。2層の客土のうち下層の方は70～80cmもの厚さがあり、第5トレンチ第4層と同一のものと思われる遺物包含層をブロック状に含んでいた。このブロックから弥生土器・土師器・磁器のほか、黒曜石剥片が出土している。

昭和60年度、隣接するバレーボールコート¹⁾の支柱埋設に伴う調査の際にも、安定した地山土と思われる黄褐色粘質土、そして湿地の地山上である青灰色粘質土を、ともにブロック状に含む攪乱土が観察されていることから、グラウンド西寄りの部分は造成時に周辺地域の遺物包含層・地山を削って運びこみ、盛って平地にしたものと思われる。

第5トレンチ 校舎の西端、1m×2.5mのトレンチ。置土は厚さ30cmと薄く、その直下に、削平著しいが客土と思われる第3層：黄褐色粘質土がトレンチ南半部にのみ残っている。この層の上面で杭例が検出されたが、いつの時期のものか明らかでない。第3層の下には黒褐色系統の庄内式併行期の遺物包含層が3層、厚さ30cmにわたって堆積していた。分層した3層の中では、最上層の第4層：黒褐色粘質土が最も遺物包含層が多い。第5層：暗褐色シルトは南半部のみの堆積で、掘削時には第4層に含めていた。第6層は黒色の砂礫となり遺物も少なくなる。

トレンチ南西端部では、これらの3層の遺物包含層の下に、さらに縄文土器のみを包含する第7層：灰黄褐色粗砂を確認した。以下、第13層：暗灰黄色砂礫の地山まで基本的には砂礫が続く。トレンチ北端部で地山上面に、植物遺体を含む第9・10層：黒褐色粗砂と有機土の堆積がみられ、縄文土器を検出したが、どちらの層からの出土か明らかでない。

遺物は、第3層から弥生土器・土師器・須恵器、第4～6層から弥生土器・古式土師器、第7層から縄文土器が出土した。第9・10層でも植物遺体に加えて縄文土器が出土している。第7層以下は堆積状況が不安定であり、谷状の窪地への流れ込みである可能性が高いが、縄文土器のみを出土することから、周辺に遺存のよい縄文時代の遺物包含層がある

教育学部附属山口中学校部分の調査（層位・遺構）

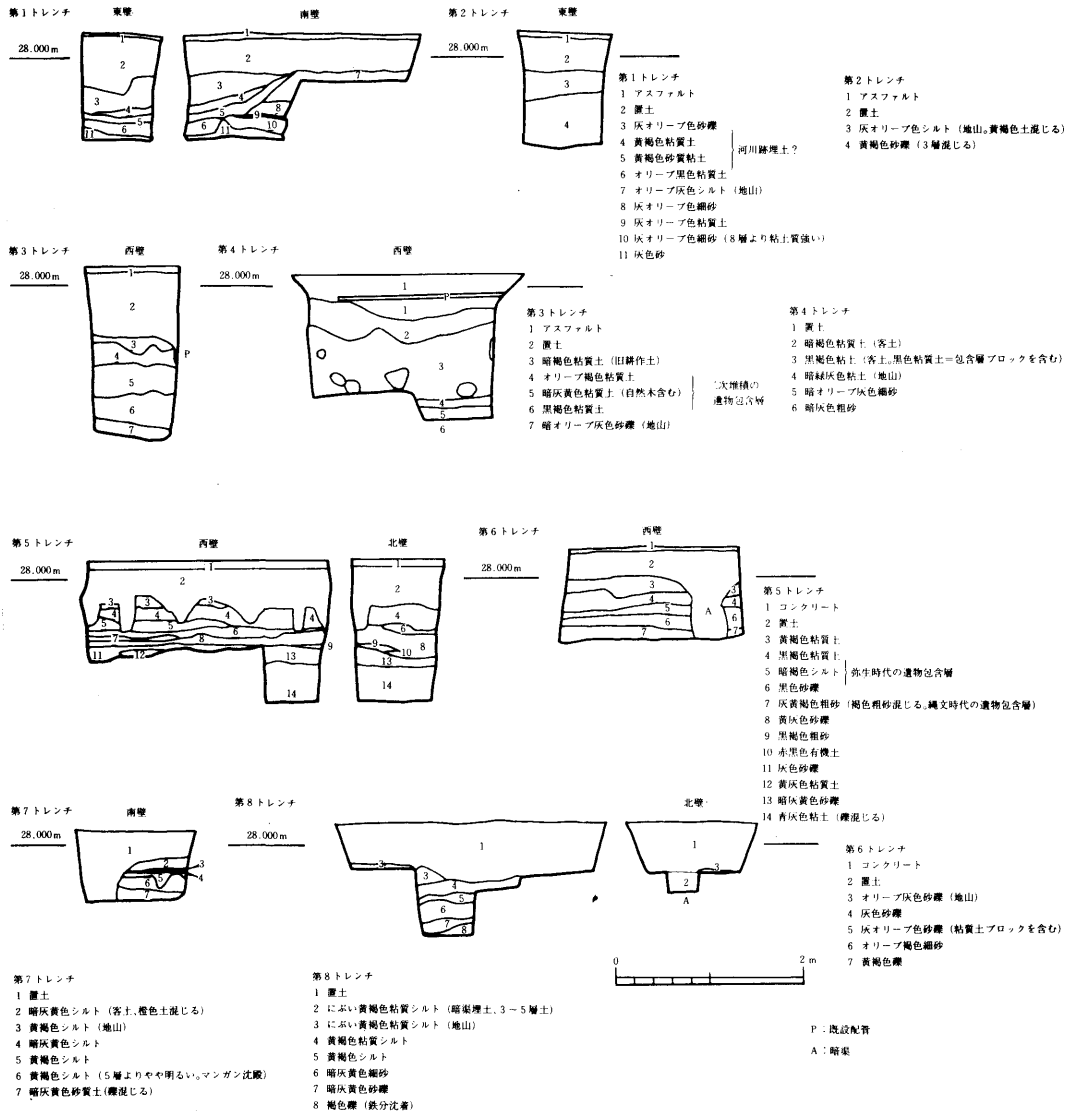


Fig. 15 土層断面図

ことは確実と思われる。

第6トレンチ 1.8m×1.8m規模のトレンチ。置土は約30cmと薄く、以下工事掘削基底面まで、角礫を主とした砂礫層と砂層が続く。これらの砂礫層からの湧水に加えて、トレンチ内を東西方向に流れる暗渠を切断したことによる水の流れ込みが激しく、ポンプで除水しながらの作業となった。顕著な遺構・遺物は検出されない。

第7トレンチ グラウンド東端中央部、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ東壁に沿って、礫を敷きつめた幅30～40cmの暗渠が走る。置土はやや薄く厚さ30～40cm、その下の第2層は山土らしいものが混じり、客土の可能性はある。以下、堆積層はすべて黄色系統で、第6層までシルト層、第7層は礫を含む砂質土層となる。顕著な遺構・遺物なし。

第8トレンチ 第7トレンチの南約25m、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ中央を南北に、第7トレンチのものにつながると思われる暗渠が走っている。厚さ50～60cmの置土直下がシルトの地山で、地山の上面は削平・攪乱が著しく、深掘りはトレンチ中央部で行なうこととなった。以下、基本層位は第7トレンチと同じで、第7層下に褐色礫層の第8層が認められた。土層の堆積は緩やかに南へ向かって下がっている。遺物は、暗渠埋土から近世の磁器片が出土したのみで、顕著な遺構は検出されない。

2 遺物

第3トレンチ出土遺物 (Fig. 16, PL. 10)

遺物は第4・5・6層から出土するが、層位の項で述べたとおり一括して取り上げた。弥生土器・古式土師器と思われる小片、須恵器、中世土師器、瓦質土器、陶器、磁器がある。炭化木材も検出された。主体となるのは中世土師器である。

1～3は土師器。1は坏口縁部で、同様の破片が他にもある。口縁は底部付近よりも厚くなり、緩く外反して尖り気味に終わる。外面の口縁下を強く横ナデするが、調整にロクロを使わない。加えて、厚手で胎土に砂粒をほとんど含まず、色調に赤みを帯びるなど、大内氏館跡B式土師器とされているものの特徴を備える。このB式土師器は大内氏の館継²⁾続期のなかでは後半期に出現し、県下では大内氏関連の遺跡でしか出土の報告をみない。³⁾他に土師器の坏、皿の口縁部はかなり出土した。それらは、口縁端部に面をもつものが若干あり、端部が丸く終わるものが残りのほとんどを占めるが、すべてロクロによる整形痕を残し、明るく焼き上げた薄手のものである。

2・3は坏または皿の底部。底部片は図示した以外にもかなりあるが、2のように体部が一旦上方に立ち上がってから外に開くようなタイプはこの資料のみで、3のように底部からすぐに外に開く器形がほとんどである。底部と体部の境の稜がやや甘くなったものも若干みられる。3は、内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。

4・5は須恵器。4は坏口縁部で、端部はやや尖り気味に終わる。5は長頸壺の底部と思われ、内面の同心円の当て具痕はナデによりほぼ消えている。

第7トレンチ グラウンド東端中央部、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ東壁に沿って、礫を敷きつめた幅30～40cmの暗渠が走る。置土はやや薄く厚さ30～40cm、その下の第2層は山土らしいものが混じり、客土の可能性はある。以下、堆積層はすべて黄色系統で、第6層までシルト層、第7層は礫を含む砂質土層となる。顕著な遺構・遺物なし。

第8トレンチ 第7トレンチの南約25m、1.2m×2.5mのトレンチ。トレンチ中央を南北に、第7トレンチのものにつながると思われる暗渠が走っている。厚さ50～60cmの置土直下がシルトの地山で、地山の上面は削平・攪乱が著しく、深掘りはトレンチ中央部で行なうこととなった。以下、基本層位は第7トレンチと同じで、第7層下に褐色礫層の第8層が認められた。土層の堆積は緩やかに南へ向かって下がっている。遺物は、暗渠埋土から近世の磁器片が出土したのみで、顕著な遺構は検出されない。

2 遺物

第3トレンチ出土遺物 (Fig. 16, PL. 10)

遺物は第4・5・6層から出土するが、層位の項で述べたとおり一括して取り上げた。弥生土器・古式土師器と思われる小片、須恵器、中世土師器、瓦質土器、陶器、磁器がある。炭化木材も検出された。主体となるのは中世土師器である。

1～3は土師器。1は坏口縁部で、同様の破片が他にもある。口縁は底部付近よりも厚くなり、緩く外反して尖り気味に終わる。外面の口縁下を強く横ナデするが、調整にロクロを使わない。加えて、厚手で胎土に砂粒をほとんど含まず、色調に赤みを帯びるなど、大内氏館跡B式土師器とされているものの特徴を備える。このB式土師器は大内氏の館継²⁾続期のなかでは後半期に出現し、県下では大内氏関連の遺跡でしか出土の報告をみない。³⁾他に土師器の坏、皿の口縁部はかなり出土した。それらは、口縁端部に面をもつものが若干あり、端部が丸く終わるものが残りのほとんどを占めるが、すべてロクロによる整形痕を残し、明るく焼き上げた薄手のものである。

2・3は坏または皿の底部。底部片は図示した以外にもかなりあるが、2のように体部が一旦上方に立ち上がってから外に開くようなタイプはこの資料のみで、3のように底部からすぐに外に開く器形がほとんどである。底部と体部の境の稜がやや甘くなったものも若干みられる。3は、内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。

4・5は須恵器。4は坏口縁部で、端部はやや尖り気味に終わる。5は長頸壺の底部と思われ、内面の同心円の当て具痕はナデによりほぼ消えている。

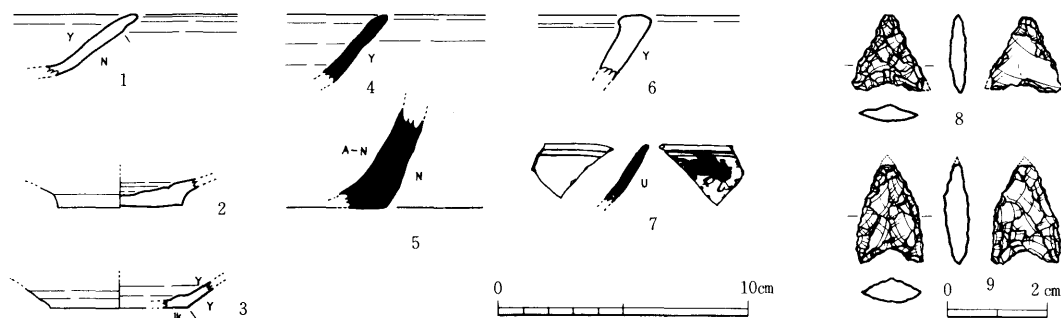


Fig. 16 第3トレンチ出土遺物実測図

6は瓦質土器の鍋口縁部。端部は肥厚して内側にやや突出し、上面は水平となる。瓦質土器には、他に格子タタキが外面に施される破片が数点ある。

7は近世の染付磁器碗の口縁部で、内外両面に2条の圈線、外面には濃淡を使い分けて唐草文を描く。陶器片もあるが図化できない。

8・9は黒曜石製の石鏃。8は^{まぐ}挟りが浅く、若干基部が広がるもので、素材の腹面を大きく残す剥片鏃である。片脚部先端欠損。先端部は磨滅によるものであろうか、丸みを帯びる。9は姫島産の石材を用い、比較的厚みをもつもので、先端部を欠損する。挟りは、深いとはいえないがしっかりしている。

第4トレンチ出土遺物 (Fig. 17, PL. 10)

遺物はすべて第3層内に混じる黒褐色粘質土ブロックから出土。主体は弥生時代終末～古墳時代初頭と思われる土器片であるが、やや遡る時期の土器底部や剥片が認められた。また降るものとして、端部に面をもつ歴史時代の土師器口縁部や染付磁器片が出土しているが、図化できない。

1は弥生土器甕の底部。大きな平底と思われ、内面にはコゲが厚く付着。弥生時代前期に遡る可能性がある。2は土師器かと思われる破片。外面には、先端の平たい楕歯を使って一単位4条の波状文を施す。内面のヘラケズリには二方向がある。内面ヘラケズリの土器肩部に波状文を施す例は、庄内・布留式併行期に各地でしばしばみられる。

3は黒曜石の剥片で、腹面には打面・打点・打瘤が残り、背面は一部礫面を残すが上下両方向からの剥離を認める。

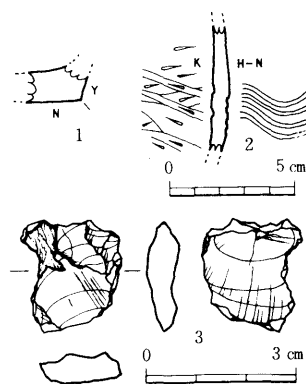


Fig. 17 第4トレンチ出土遺物実測図

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査

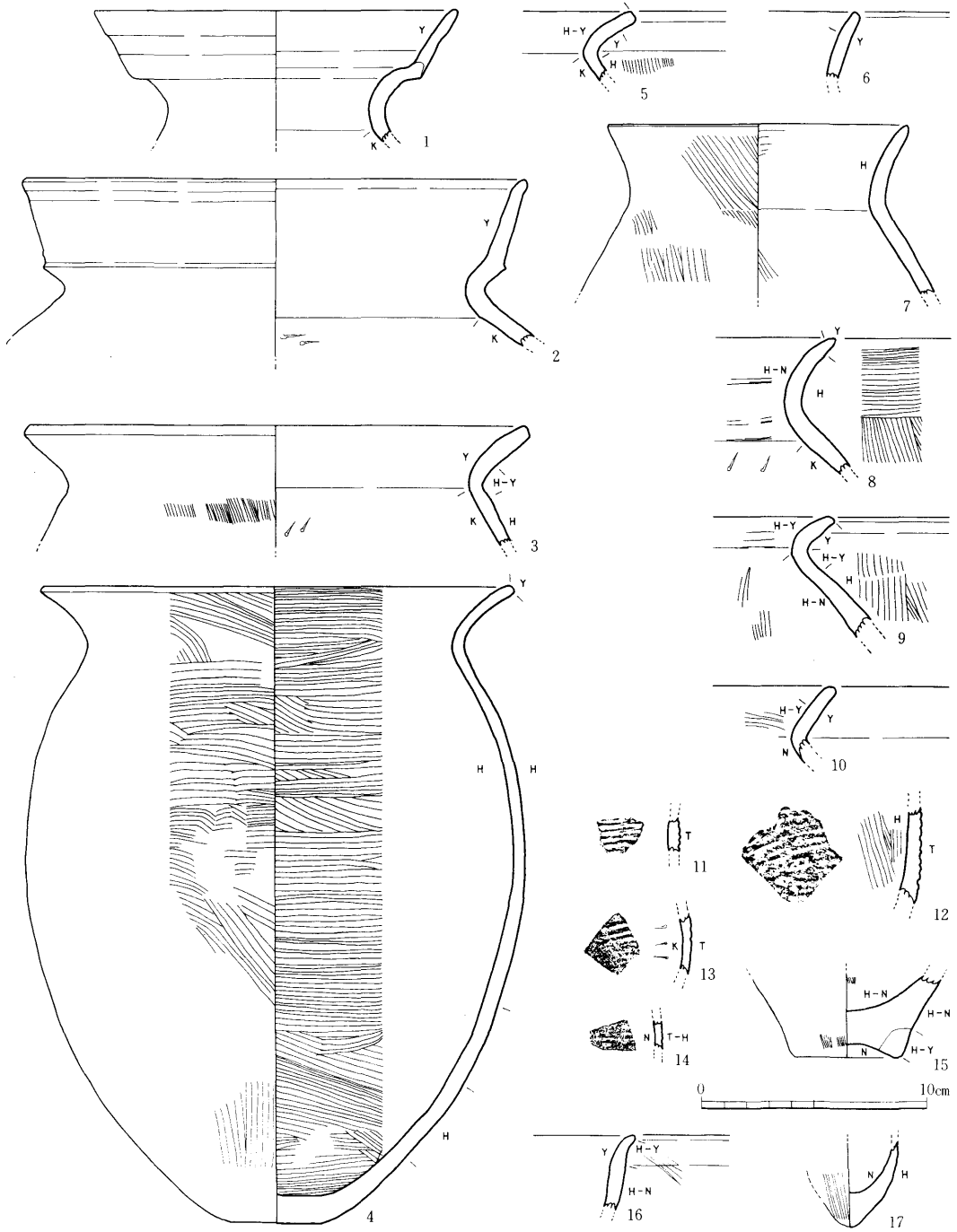


Fig. 18 第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図(1)

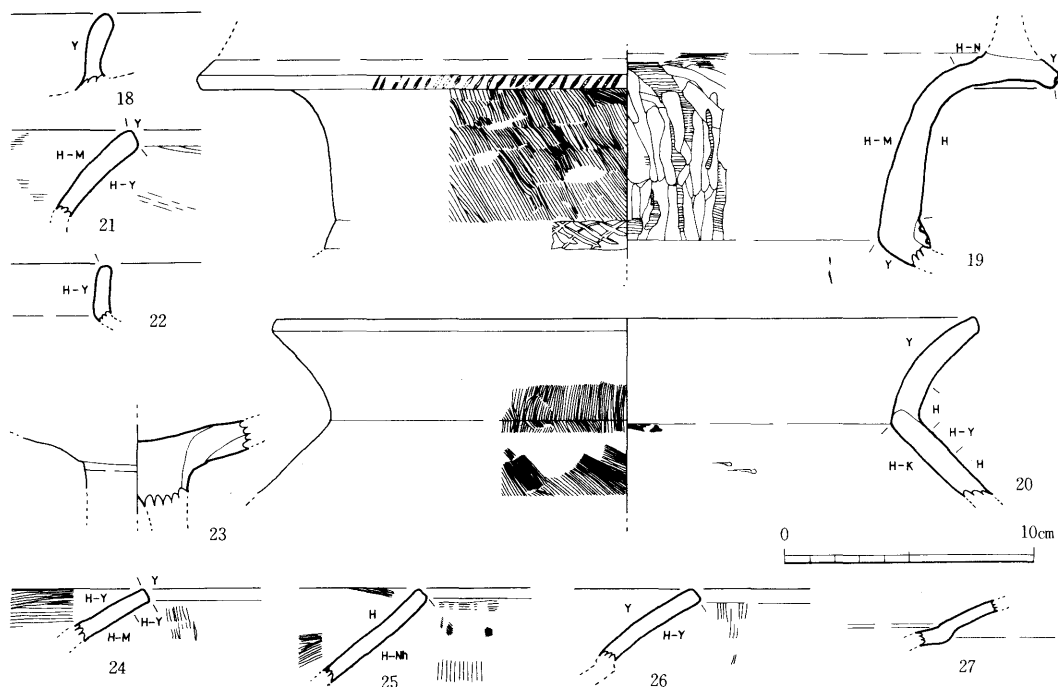


Fig. 19 第5トレンチ第4・5・6層出土遺物実測図（2）

第5トレンチ出土遺物（Fig. 18～21, PL. 10・11）

遺物は、第3・4・5・6・7・9・10層からそれぞれ出土した。

客土と思われる第3層からは、下の第4～6に対応すると思われる土器小片若干（壺・甕・高坏など。顕著に刷毛目が残るが外面に赤色顔料を塗布する小片あり）のほか、糸切り底の土師器底部、古代と思われる須恵器片が出土しているが、図化しえない。

第4・5・6層出土遺物（Fig. 18・19）

第4・5層の遺物は、取り上げの段階で混合していると思われる、また第4・6層間の遺物が接合することから、第4～6層はここでは一括して取り扱うこととする。ほとんどが庄内式併行期と思われる土器で、甕・鉢・壺・高坏・有翼支脚がある。他の時期のものとしては、弥生時代中期初頭の甕が1点ある程度である。植物遺体も検出されている。

1～14は甕。1・2は明らかに山陰の影響を受けたと思われるものである。1は比較的頸が窄まり、口縁端部が尖るもので、風化しているが、外面ほぼ全面に煤の付着がみられる。2は大型。口縁端部はやや尖り気味ながら丸くおさめ、立ち上がりの段は上向きで、1より若干後出するかとも思われる。1に比べて焼成がよく、つくりが精巧で、搬入品の

可能性がある。煤の付着がなく、壺かもしれない。双方とも肩部内面は横方向のヘラケズリ、他はナデ仕上げで文様は認められない。花谷めぐむ氏編年の鍵尾A区5号墓式⁴⁾。

甕には、赤・黄色系統の軟質焼成のもの、黄灰色の硬質焼成のものがある。

「く」の字に曲がる甕の口縁部（3～10）は、端部が面をもつもの（3～6）と、尖り気味になるもの（7～10）とに分けられる。4は反転して完形復原できたもので、器壁は薄く、内外面とも刷毛目仕上げ。底部付近は二次加熱による赤変が著しい。風化の著しい3・7を除いては、外面に多量の煤の付着が観察できる。

甕の胴部外面には、ほとんどの個体が刷毛目を顕著に残す。内面は刷毛目または刷毛目後ナデ仕上げのもののほか、ヘラケズリのものが多くみられる。3・8のヘラケズリは縦、5は横方向。外面にタタキの認められる破片がある（11～14）が、小片のため方向は不明。13・14は薄手で非常に硬質。搬入品であろう。14はタタキの後刷毛目を施す。

甕の底部は、完形になる4で確認できた小さな平底のほかは、弥生時代中期初頭のものと思われる上げ底のもの（15）が確認できたにすぎない。おそらく不安定な平底または丸底になると考えられるものがあるが、破片のため底部と断定できない。

鉢と思われるものには16・17がある。16は短く外反する口縁片で、ほぼ直立する。17は尖底の底部片で、小型の鉢になるものであろう。

18～22は壺。複合口縁をもつもの（18・19）と、「く」の字に外反する口縁をもつもの（20・21）とがある。18は口縁の立ち上がり部分で、精巧なつくり。19は立ち上がり部分と肩部以下を欠く。頸部はほぼ直立し、肩部との境の突帯に斜格子の刻みを入れ、立ち上がりの段の端部には刷毛目原体の小口を使って刻みを施す。内面は、ミガキの及ばなかった箇所に残る刷毛目が目立つ。20は外面に非常に繊細な刷毛目残り、肩部内面は横方向のヘラケズリ。胎土が脆い。21は内面に横方向のミガキが施され、刷毛目がほぼ消える。硬質焼成。22は直口する短頸壺と思われる。端部は丸みを帯びながらもやや面をもつ。

壺には他に、内面粗く、外面丁寧にミガキをかけているが、外面には全体に煤の付着する底部近くの破片などがある。

23～27は高坏。23は坏底部から脚柱部にかけての破片で、脚柱は差し込み式。不器用なつくりで、器壁の厚みが場所によって全く違う。図化できる口縁（24～26）はすべて端部に平坦面をもつ。25は2種類の原体で内外面に刷毛目を施した後、外面に縦方向のヘラナデを行なう。27の坏の屈曲はしっかりしているが、胎土・焼成が悪い。

図化しなかったが、他に有翼支脚の翼部の破片が出土している（P L. 11-28）。

教育学部附属山口中学校部分の調査（遺物）

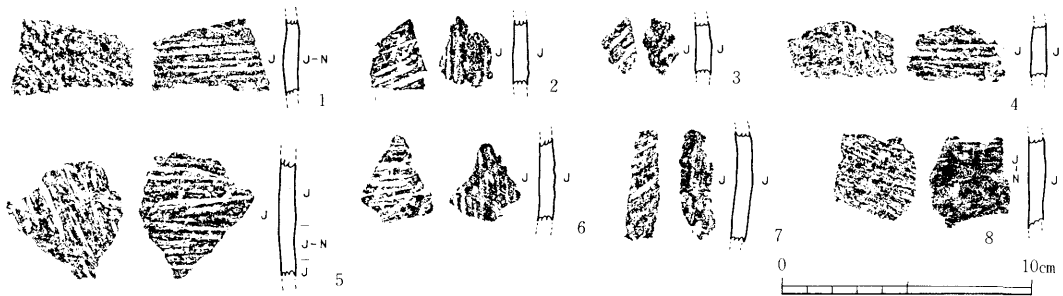


Fig. 20 第5トレンチ第7層出土遺物実測図

述べてきたとおり、第4～6層出土の遺物は、山陰系の複合口縁甕の型式、また山本一朗氏編年の弥生時代終末期にあたる防長10式に特徴的な複合口縁壺・有翼支脚⁵⁾の存在、そしてタタキのある甕の存在などから、ほぼ庄内式併行期のものとみてよいと思われる。

第7層出土遺物 (Fig. 20)

縄文土器のみが出土した。時期の断定はできかねるが、おそらく後・晩期であろう。

1～7は胎土・色調・焼成・調整ともにたいへん似通っており、同一個体かと思われるが接合しない。図化しなかったが同様の小片がもう1片ある。器形などが窺える破片はない。条痕の方向は、破片ばかりのため断定しきれないが、おそらく外面は縦および斜方向、内面は横方向で、外面は条痕の後ナデている箇所もある。内外面で条痕の工具が違う。3は内面にコゲらしいものが付着している。

8は、外面は条痕文を施すが、内面は条痕の後丁寧なナデで条痕を消していることが1～7との大きな違いである。また条痕自体が1～7のものより細かく、方向が内外面とも同じであることも差のひとつとなろう。

第9・10層出土遺物 (Fig. 21)

縄文土器と植物遺体が出土した。

1は胎土に滑石を含む疑いがある。内面条痕後粗いナデ、外面はナデしか観察できない。2は第7層出土の1～7と色調・外面の調整がよく似ているが、内面は丁寧なナデである。1の胎土からみれば、縄文時代前期・中期のものである可能性があり、やや不安が残るが、一応、第7層と大差ない時期のものとして捉えておきたい。

なお植物遺体は、第4・5層が樹木の樹皮及び木質片の細片、第9層は樹木の樹皮片、木質片、葉の基部片及び種子の果皮の細片及び微

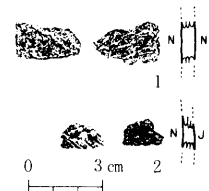


Fig. 21 第5トレンチ第9・10層出土遺物実測図

片であった。種類と個体数について、以下農学部講師の宇都宮宏氏の鑑定結果を報告する。

これらの植物遺体を丁寧に水洗して、ろ紙上に置き、樹皮、葉及び果皮はそのまま自然乾燥させて、解剖顕微鏡で表面構造を観察した。また木質については、木口、征目、板目の試料切片を作製して、生物顕微鏡で鏡検し、植物の種類を同定した。

第9層からはアラカシ (Quercus glauca Thunb) 173片 (樹皮・木質172片、葉片1)、コナラ (Quercus serrate Thunb) 11片 (樹皮・木質)、クヌギ (Quercus acutissima Carr) 15片 (樹皮・木質13片、堅果の果皮2)、イヌブナ (Fagus japonica Maxim) 17片 (樹皮・木質)、スギ (Cryptomeria japonica D. Don) 3片 (木質)、また第4・5層からはイヌブナ7片 (木質) であった。ブナ科の樹木が優先しており、アラカシは樹皮の観察からみて、比較的大きい木と考えられた。また気候的変動による樹種の変化はないものと考えられる。

Tab. 3 出土遺物観察表

法量 () は現存値

No.	器種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色調	胎土	焼成	備考
第3トレンチ (Fig.16)							
1	土師器 坏	-	(2.5)	外面 内面 にぶい黄橙色 (10YR7/2)	精緻 砂粒はほとんど含まない	良好	
2	土師器 坏か皿	*5.0	(1.1)	外面 内面 灰白色 (2.5Y8/2)	良好 1mm程度の砂粒を若干含む	やや甘い	
3	土師器 坏か皿	*5.5	(1.0)	外面 内面 淡黄色 (2.5Y8/3)	精良 1mm以下の砂粒を若干含む	きわめて良好	内外面丹塗
4	須恵器 坏	-	(2.6)	外面 内面 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)	良好 1mm以下の石英・長石を含む	普通	
5	須恵器 長頸壺	-	(4.0)	外面 内面 灰黄色 (2.5Y7/2) 灰白色 (2.5Y7/1)	やや粗い 1mm程度の石英・長石を多く含む	良好	
6	瓦質土器 鍋か	-	(2.3)	外面 内面 灰色 (5Y5/1) 淡黄色 (2.5Y8/3)	良好 1mm以下の砂粒を若干含む	普通	
7	磁器 碗	-	(2.4)	素地 釉 灰白色 (5GY8/1) やや青味を帯びた透明	精良	良好	
第4トレンチ (Fig.17)							
1	甕	-	(1.4)	外面 内面 にぶい橙色 (2.5YR6/4) コゲの付着のため不明	良好 1mm程度の石英、1mm以下の長石を各々多く含む	きわめて良好	二次加熱により赤変著しい。内面コゲ付着
2	甕	-	(5.0)	外面 内面 灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄色 (2.5Y6/2)	良好 2mm以下の石英、1mm以下の長石、金剛砂等多く含む	きわめて良好	
第5トレンチ 第4・5・6層 (Fig.18・19, PL.11)							
1	甕	16.0	(5.8)	外面 内面 浅黄橙色 (7.5YR8/3) 浅黄褐色 (7.5YR8/4)	良好 1mm程度の石英・長石を含む	やや甘い	外面煤付着
1	甕	22.0	(7.3)	外面 内面 灰黄色 (2.5Y7/2) 灰黄色 (2.5Y6/2)	精良	きわめて良好	
3	甕	21.9	(5.2)	外面 内面 橙色 (7.5YR7/6) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好 1mm程度の石英・長石を含む	普通	
4	甕	20.7 *4.0	28.2	外面 内面 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 灰黄褐色 (10YR5/2)	普通 2mm以下の石英、1mm以下の長石を含む	きわめて良好	外面煤付着
5	甕	-	(3.1)	外面 内面 灰褐色 (5YR5/2) 灰色 (5Y4/1)	普通 1~3mmの石英・長石を含む	良好	外面煤付着
6	甕	-	(3.0)	外面 内面 灰黄褐色 (10YR6/2)	良好 石英を若干含む	甘い	外面煤付着
7	甕	13.2	(7.5)	外面 内面 橙色 (7.5YR7/6) にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好 1mm程度の石英・長石若干含む	甘い	
8	甕	-	(6.0)	外面 内面 にぶい黄褐色 (10YR6/3) にぶい黄褐色 (10YR7/3)	良好 2mm以下の石英を若干含む	きわめて良好	外面煤付着
9	甕	-	(5.4)	外面 内面 灰黄褐色 (10YR6/2) 灰黄色 (2.5Y7/2)	良好 2mm以下の石英、1mm程度の長石を若干含む	きわめて良好	

教育学部附属山口中学校部分の調査（遺物）

10	甕	—	(3.4)	外面 灰白色(10YR7/1) 内面	良好	2mm程度の石英・1mm程度の長石若干含む	きわめて良好	外面煤付着
11	甕	—	(1.5)	外面 におい黄橙色(10YR7/3) 内面	やや粗い	2mm以下の石英・長石かなり含む	良好	外面煤付着
12	甕	—	(4.3)	外面 におい黄褐色(10YR5/3) 内面 灰黄褐色(10YR6/2)	やや粗い	2mm以下の石英・長石かなり含む	良好	外面煤付着
13	甕	—	(2.6)	外面 におい黄橙色(10YR7/3) 内面	精良	1mm以下の石英・長石含む	きわめて良好・堅固	
14	甕	—	(1.1)	外面 におい黄橙色(10YR7/3) 内面	良好	1mm以下の石英・長石含む	きわめて堅固	外面煤付着
15	弥生土器 甕	*4.4	(3.5)	外面 黄灰色(2.5Y6/1) 内面 黄灰色(2.5Y5/1)	やや粗い	1~3mmの石英・長石・黒雲母多く含む	良好	
16	鉢	—	(3.3)	外面 灰白色(2.5Y8/2) 内面 灰色(7.5Y5/1)	精良	1mm程度の石英・長石を含む	良好	
17	鉢	—	(3.3)	外面 におい黄橙色(10YR7/2) 内面	精良	1mm程度の石英を若干含む	きわめて良好	
18	壺	—	(3.0)	外面 灰白色(10YR7/1) 内面 におい黄褐色(10YR7/2)	良好	2mm程度の石英・1mm程度の長石を若干含む	きわめて良好	
19	壺	—	(8.5)	外面 におい黄褐色(10YR7/2) 内面 灰褐色(7.5YR4/2)	精良	1mm程度の石英・長石含む	良好	
20	壺	27.8	(7.1)	外面 におい黄褐色(10YR7/4) 内面	良好	1mm程度の石英・長石含む	やや甘い	
21	壺	—	(3.3)	外面 におい黄褐色(10YR7/3) 内面 におい黄褐色(10YR7/2)	精良	砂粒(石英・長石)微量含む	きわめて良好	
22	壺	—	(2.3)	外面 浅黄褐色(10YR8/3) 内面 灰白色(10YR8/2)	良好	1mm程度の石英・長石若干含む	やや甘い	
23	高 坏	—	(3.5)	外面 におい黄褐色(10YR7/2) 内面	粗い	4mm以下の石英・長石・片岩等かなり含む	良好	
24	高 坏	—	(2.0)	外面 におい黄褐色(10YR6/3) 内面	精良	1mm程度の石英・1mm以下の長石を若干含む	きわめて良好	
25	高 坏	—	(3.6)	外面 黒色(7.5Y2/1) 内面 灰黄色(2.5Y7/2)	良好	2mm以下の石英・長石を含む	良好	
26	高 坏	—	(2.8)	外面 灰黄色(2.5Y7/2) 内面 灰白色(2.5Y8/2)	やや粗い	1~2mmの石英・1mm程度の長石を多量に含む	良好	
27	高 坏	—	(1.8)	外面 におい黄褐色(7.5YR7/3) 内面	粗い	1~3mm程度の石英・1mm程度の長石を含む。特に石英が多い	甘い	
28	有翼支脚	—	—	灰黄色(2.5Y6/2)	普通	2mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	良好	
第5トレンチ 第7層 (Fig.20)								
1	縄文土器	—	(3.1)	外面 灰黄色(2.5Y6/2) 内面 黒色(5Y2/1)	精良	1mm以下の石英を含む	良好	
2	縄文土器	—	(2.6)	外面 黒褐色(10YR3/1) 内面 黒色(10YR2/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
3	縄文土器	—	(2.2)	外面 灰黄褐色(10YR6/2) 内面 褐灰色(10YR4/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
4	縄文土器	—	(2.2)	外面 灰黄褐色(10YR5/2) 内面 褐灰色(10YR4/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
5	縄文土器	—	(4.9)	外面 灰黄褐色(10YR4/2) 内面 褐灰色(10YR4/1)	精良	1mm以下の石英を含む	良好	
6	縄文土器	—	(3.5)	外面 灰黄褐色(10YR5/2) 内面 黒色(10YR2/1)	精良	1mm以下の石英を含む	良好	
7	縄文土器	—	(4.5)	外面 灰黄褐色(10YR5/2) 内面 黒褐色(10YR3/1)	精良	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
8	縄文土器	—	(3.7)	外面 灰黄色(2.5Y6/2) 内面 灰黄褐色(10YR5/2)	良好	2mm以下の石英を含む	きわめて良好	
第5トレンチ 第9・10層 (Fig.21)								
1	縄文土器	—	(1.6)	外面 黒色(N 2/0) 内面 暗灰色(N 3/0)	良好	2mm以下の砂粒含み滑石混入か	きわめて良好	
2	縄文土器	—	(1.2)	外面 におい褐色(7.5YR6/3) 内面 暗青灰色(5PB3/1)	良好	3mm以下の砂粒含む	良好	
No.	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 質	備 考	
第3トレンチ (Fig.16)								
8	石 鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	黒曜石		
9	石 鏃	(1.9)	1.3	0.5	(0.9)	黒曜石(姫島産)		
第4トレンチ (Fig.17)								
3	剥 片	2.2	2.0	0.7	2.3	黒曜石		

3 小 結

(1) 出土遺物について

第3・4・5トレンチで遺物が出土し、特に第5トレンチでは、器形の全体を示すものがなく器種構成などもわからないが、興味深い資料が多く出土した。

第3トレンチでは、ほぼ中世主体の遺物が検出された。そのなかに、これまで大内氏館跡と瑠璃光寺跡遺跡でしか確認されていなかった、大内氏館跡B式土師器が確認された。このB式土師器は大内氏内部で自給自足的に製作・消費された土器と推定されるが、館跡⁶⁾でのおびただしい出土量にもかかわらず、その生産跡と覚しきものはまだ発見されない。当附属中学校敷地は、大内氏館跡の南西わずか1kmの場所にあり、この周辺に大内氏関連遺跡またはB式土師器の生産にかかわる施設が存在していた可能性がうかんだ。

第5トレンチでは、2時期の遺物包含層を確認した。

第4～6層からは、周防部に特徴的な複合口縁壺や佐波川・樺野川流域に特徴的な有翼支脚など在地性の強い土器のほかに、山陰系の複合口縁甕、畿内庄内式土器の影響を窺わせるタタキ技法のみられる破片など、外来要素の強い土器が出土し、注目される。

これらの土器群の時期については、タタキのある破片（タタキの上から刷毛目を施すものも含む）があること、庄内式に後続する布留式土器と認定できるものが見当たらないこと、また在地の土器がその形態をまだ保持していることなどから、庄内式併行期すなわち防長10式の範疇におさまるであろうが、小範囲の調査で、器種構成や器形全体を検討しうるだけの資料のない現段階では、時期を限定することは控えたい。

今回出土の山陰系土器は、58年度調査で小学校から出土したものとは焼成・色調にかなりの違いがあり、形態的にもやや差があるが、やはり庄内式併行期の所産としておきたい。また従来、山口県内での山陰系土器出土の中心は、やはり「山陰」の長門部にあるとされていたが、近年、佐波川・樺野川流域での発見例が増え、この流域独自の直接流入経路が考えられるに至った。⁸⁾この考えを補強する出土例が、今回またひとつ増えたことになる。

周防部は、外来の勢力を遠ざけて在地の弥生時代の特色を遅くまで固守した地域であるが、周防の端部、いわば辺境の地では、在地の特色を残しながらも周防中心部よりかなり早く他地域の土器を受け入れたことを裏付ける結果となった。⁹⁾

第7・9・10層では縄文土器を検出した。周辺では、亀山をはさんで北東方向約500mにある現県立図書館の地に、縄文時代晩期の土器を多量に出土した¹⁰⁾後河原（^{うしろがわら まつがら}松柄）遺跡があるが、これに次いで2遺跡目という希少な例で、周辺への拡がりの確認が待たれる。

(2) 埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

グラウンド東側の第7・8トレンチで、比較的安定した地山とみられるシルト層を確認した。しかし、東の亀山が元来もっと裾野をのばしていたものと考えられ、第4トレンチの所見からみても、おそらくこの層の上面は削平され、往時の状況をとどめてはいまい。

また北側は、附属小学校からなだらかに下る地形で、鴻峰山から南へのびる丘陵の縁辺部か、またはそれには含まれる谷であったと考えていたが、第6トレンチでは、薄い置土の下に厚い礫層が堆積して湧水し、谷または河川状の遺構の存在を感じさせた。第1トレンチの土層の落ち込みがはたして河川であり、これと関係するものかどうかが注目される。

附属山口中学校敷地内での遺物出土・遺物包含層の堆積は、ほぼ西半部の白石小学校寄りに限られている。部分的な小規模トレンチの調査では、地下の状況の全容をつかむことが難しいのはいうまでもないが、今回調査の各トレンチ間では土層の堆積状況があまりにも違い、各遺物包含層の拡がりや全く捉えられなかった。例えば、第5-3トレンチ間、第5-4トレンチ間はそれぞれ約30m、第5-2トレンチ間はわずか18mの距離しかないが、層位・遺物包含層の土質・含まれる遺物の時期などが、全く違う様相を呈している。この原因や、各包含層の拡がりを把握することは、今後の大きな課題といえる。

また、第5トレンチ第4～6層は、小学校部分の遺物包含層と土質が酷似することから、当初一連のものかと考えていた。しかし小学校の遺物包含層では、布留式末期の遺物を主としており、庄内式におさまるこの中学校部分とは時間的に大きな差を認めたため（前節参照）、中学校部分でも、今後調査を進めてゆく上で、布留式の確認とともに、遺物包含層が、実は分層できるのではないかとの視点が必要となってきた。弥生時代中期土器の混在¹¹⁾については、亀山西麓に所在する亀山遺跡が該期の遺跡であり、今後注意が必要となるかもしれない。

2枚の縄文土器包含層は砂層であり、礫層にはさまっている状態であった。湧水もあり、あまり安定した出土状況とはいえない。先述の後河原遺跡の包含層も、一ノ坂川が、山口盆地最大といわれる規模の扇状地を形成する過程での二次堆積層とされる。しかしこの中学校部分は、亀山の陰に隠れ一ノ坂川の堆積作用を受けにくい地理的条件にあるため、周辺の今後の調査で遺構などが検出される可能性を、十分に考慮するべきであろう。

以上のことから、配管が予定される路線について、特に注意が必要と思われる白石小学校に面する地域を事前調査とし、他の地域は工事施工時に立会調査を行なうことが妥当と考える。ただ、今回の試掘調査では土層の平面的な拡がりを捉えるに至らなかったため、

立会調査とした部分に何らかの埋蔵文化財が存在する可能性はある。(杉原)

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口中学校球技コート整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。
- 2) 山口市教育委員会「大内氏館跡Ⅶ－大内氏遺跡調査概報Ⅶ・概要－」(山口市埋蔵文化財調査報告第23集、1987年)。
- 3) 大内氏館跡のほかには、山口市仁保の瑠璃光寺跡遺跡で中世墓の副葬品として出土した例があるとされる(a)。この遺跡は、報告書発刊に先だって概要が報告され、仁保氏の墓地であるとの考えが提示されている(b)。仁保(平子)氏は鎌倉時代初めに仁保荘の地頭として派遣され、在地の守護大内氏とは当初敵対関係にあったが、南北朝の争乱のころから大内氏につき、室町時代になると次第に重く任用されたという(c)。大内氏がB式土師器をしていたとされる館の後半期と思われる時期には大内氏の重臣として活躍していたことが窺え、個人墓の供献土器として使用を許されたとしても不思議はあるまい。
 - a 柴崎文男「昭和61年度調査」(『大内氏館跡Ⅶ－大内氏遺跡調査概報Ⅶ・概要－』(山口市埋蔵文化財調査報告第23集、山口市教育委員会、1987年))
 - b 小田村宏「瑠璃光寺跡遺跡の発掘調査」(『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年)
 - c 田中倫子「中世」(『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年)
- 4) 山陰系土器の編年は、壺・甕の複合口縁部の基本的な分類序列においてはほぼ固まっている。口縁の立ち上がり外面に櫛描き凹線文がなく、口縁端部が尖り気味であるというこの甕の特徴のみを取り上げれば、久しく鍵尾Ⅱ式とされていたものに相当しよう(a)。しかし、他の器種や他地域との併行関係に目を向けたとき、その捉え方は未だ定まっていない。ここでは一応、庄内式古段階に併行する型式とする花谷氏に従っておく(b)。
 - a 前島己基・松本岩雄「鳥根県神原神社古墳出土の土器－土器型式にみるその編年の位置について－」(『考古学雑誌』第62巻第3号、1976年)
 - b 花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究－鳥根県内の資料を中心に－」(『鳥根考古学会誌』第4集、1987年)
- 5) a 山本一朗「防長の弥生式土器」(『山口県の弥生式土器－集成と編年－』、周陽考古学研究所報2、1979年)。
b 山本一朗「防長の土師器」(『山口県の土師器・須恵器－集成と編年－』、周陽考古学研究所報3、1981年)。
氏は、文献aで設定した防長10式末に対する考えを、文献bで修正し、山口盆地にある湯田楠木町遺跡出土の土器群を防長10式の最終末に置いて庄内式併行期とした。なお湯田楠木町遺跡は附属中学校の南西約1.5kmにある。
- 6) 前掲注3) a 文献と同じ。
- 7) 附属山口中学校の南西約3kmの地点にある下東遺跡KD-4出土の資料が庄内式新段階に併行し、この時期には周防系の複合口縁壺は消滅しているとする考えがある。これに従えば、下東遺跡の山陰系土器が、今回出土のものより若干降る形態と思われることもあわせ、今回調査の土器群が庄内式新段階を遡る可能性も考えられよう。吉田寛「庄内式併行期前後の西部瀬戸内(I)－吹越A式に関するノート－」(『Relics』創刊号、山口大学考古学研究室、1985年)。
- 8) 前掲注5) b 文献では、周防と長門との緩衝地帯であるため独自性に乏しかった佐波川・樺野川の流域に、防長10式期になって突然、佐波型の複合口縁壺と有翼支脚という強い地域性が現れ、続いて畿内との共通性の高い土器を多く出土する遺跡が集中するという事実は、初期の畿内系古墳の出現のしかたに通じており、在地の大勢力を避け、独自の文化をもたない地域からまず組み込んでいくという視点によるものだと見解を提示している。
- 9) 防長10式期前後の佐波川・樺野川流域が、周防と長門との単なる緩衝地帯でなく、すでにある程度の独自性をもった一地域であったということの傍証となる考えである(a)。なおこの論考で、山口県出土の山陰系土器が集成されているが、その後新たに報告されたものとして、山口市仁保の丸山遺跡の表採資料を追加しておく(b)。
 - a 高下洋一「山口県出土のいわゆる山陰系土器について」(『Relics』第3号、山口大学考古学研究室、1986年)
 - b 小田村宏「先史・原史」(『仁保の郷土史』、仁保の郷土史刊行会、1987年)
- 10) 浜田清吉「山口市後河原の遺物発見地」(山口大学教育学部、1953年)。
- 11) 小野忠熙「本州の西端地方における古代の壘・壕遺跡」(『古代学』第5巻第2号、古代学協会、1956年)。



(1) 第1トレンチ全景(西から)



(2) 第1トレンチ東壁土層断面(西から)

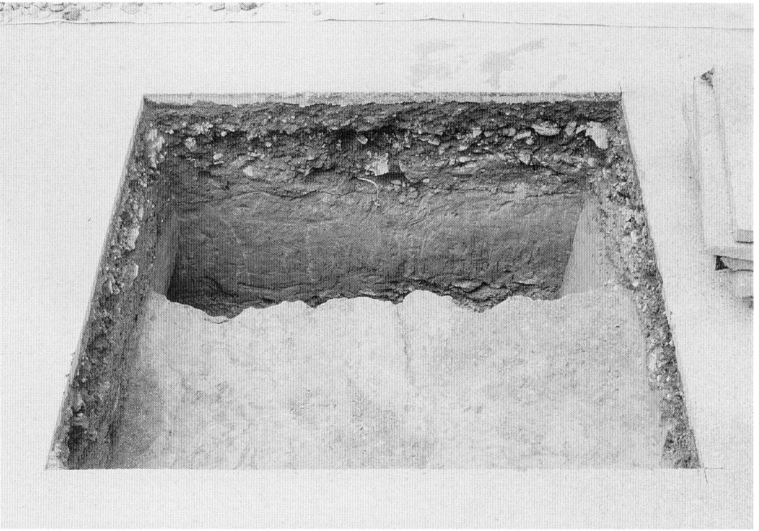


(3) 第3トレンチ全景(南から)



(4) 第4トレンチ全景(西から)

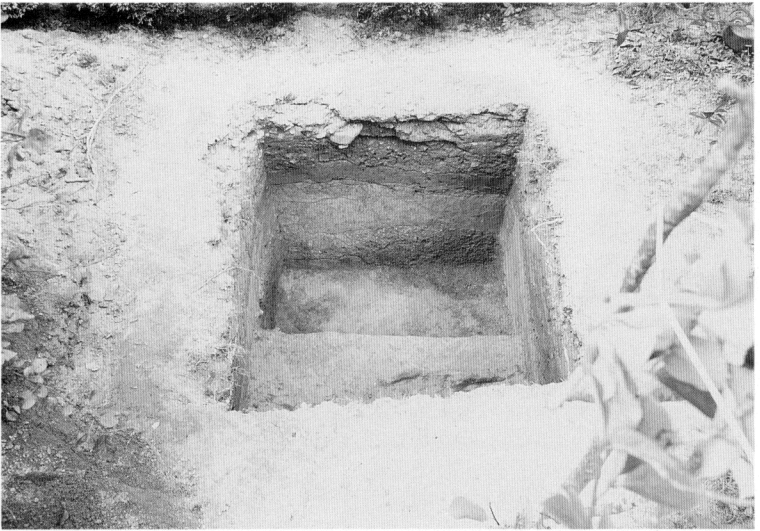
亀山構内教育字部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(2) (小学校)



(1) 第5トレンチ全景(南から)



(2) 第6トレンチ全景(南から)



(3) 第7トレンチ全景(西から)



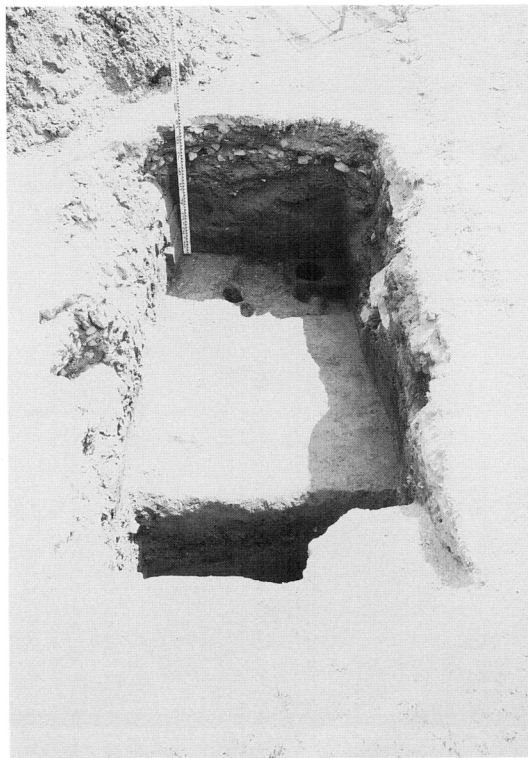
(4) 第9トレンチ全景(東から)



(1) 第10トレンチ全景(北から)



(2) 第11トレンチ全景(南から)



(3) 第12トレンチ全景(南から)



(4) 第13トレンチ全景(北から)

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(4)(小学校)



(1) 第13トレンチ内壁土層断面(北から)



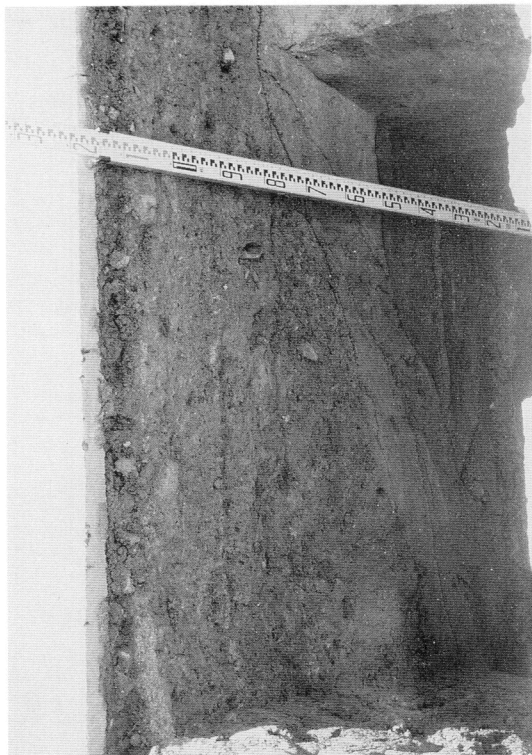
(2) 第14トレンチ全景(北から)



(3) 第15トレンチ全景(北から)



(4) 第16トレンチ全景(南から)



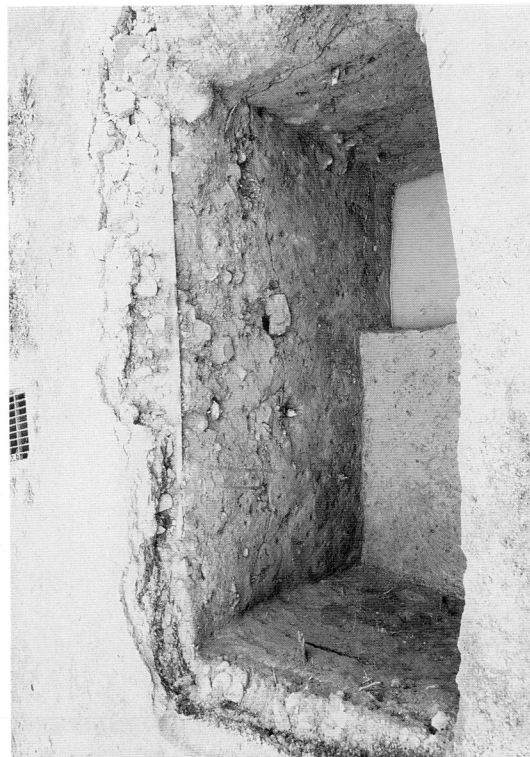
(1) 第1トレンチ南壁土層断面(北から)



(2) 第2トレンチ南壁土層断面(北から)



(3) 第3トレンチ西壁土層断面(東から)



(4) 第4トレンチ西壁土層断面(東から)

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(6)
(中学校)



(1) 第5トレンチ第4～6層遺物出土状況
(南から)



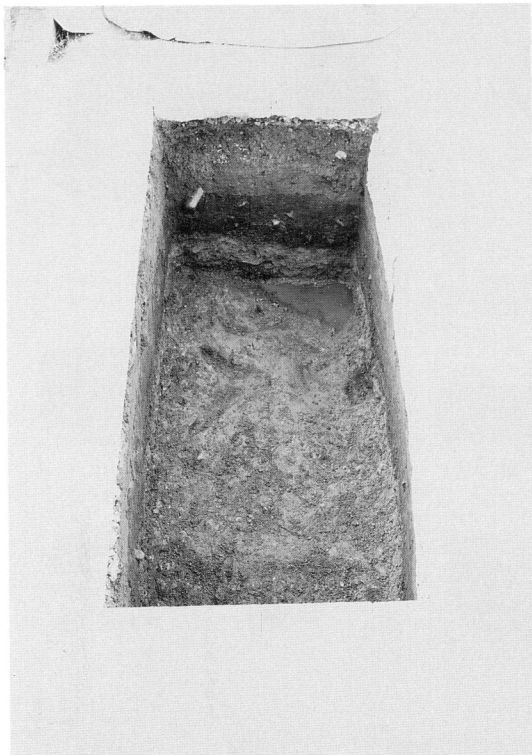
(2) 第5トレンチ第4～6層遺物出土状況
(東から)



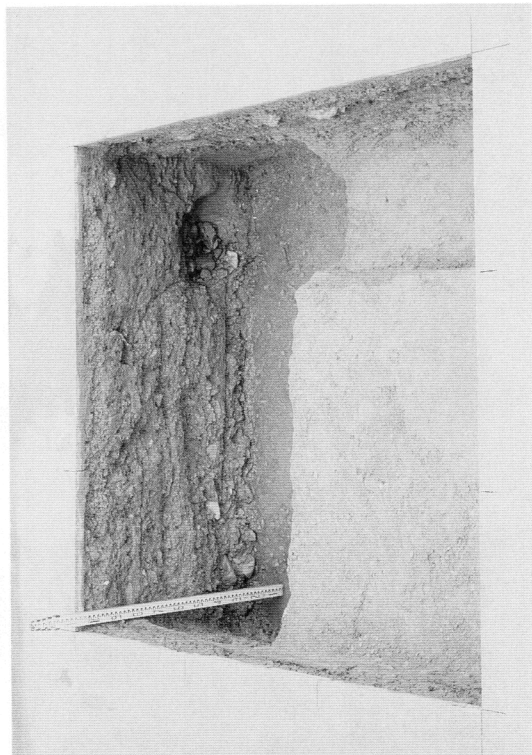
(3) 第5トレンチ第4～6層完掘状況(南から)



(4) 第5トレンチ北壁土層断面(南から)



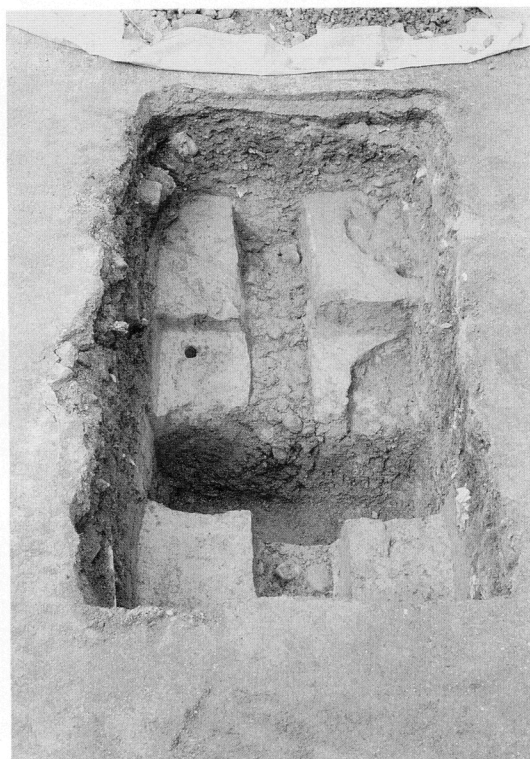
(1) 第5トレンチ完掘状況(南から)



(2) 第6トレンチ全景(東から)



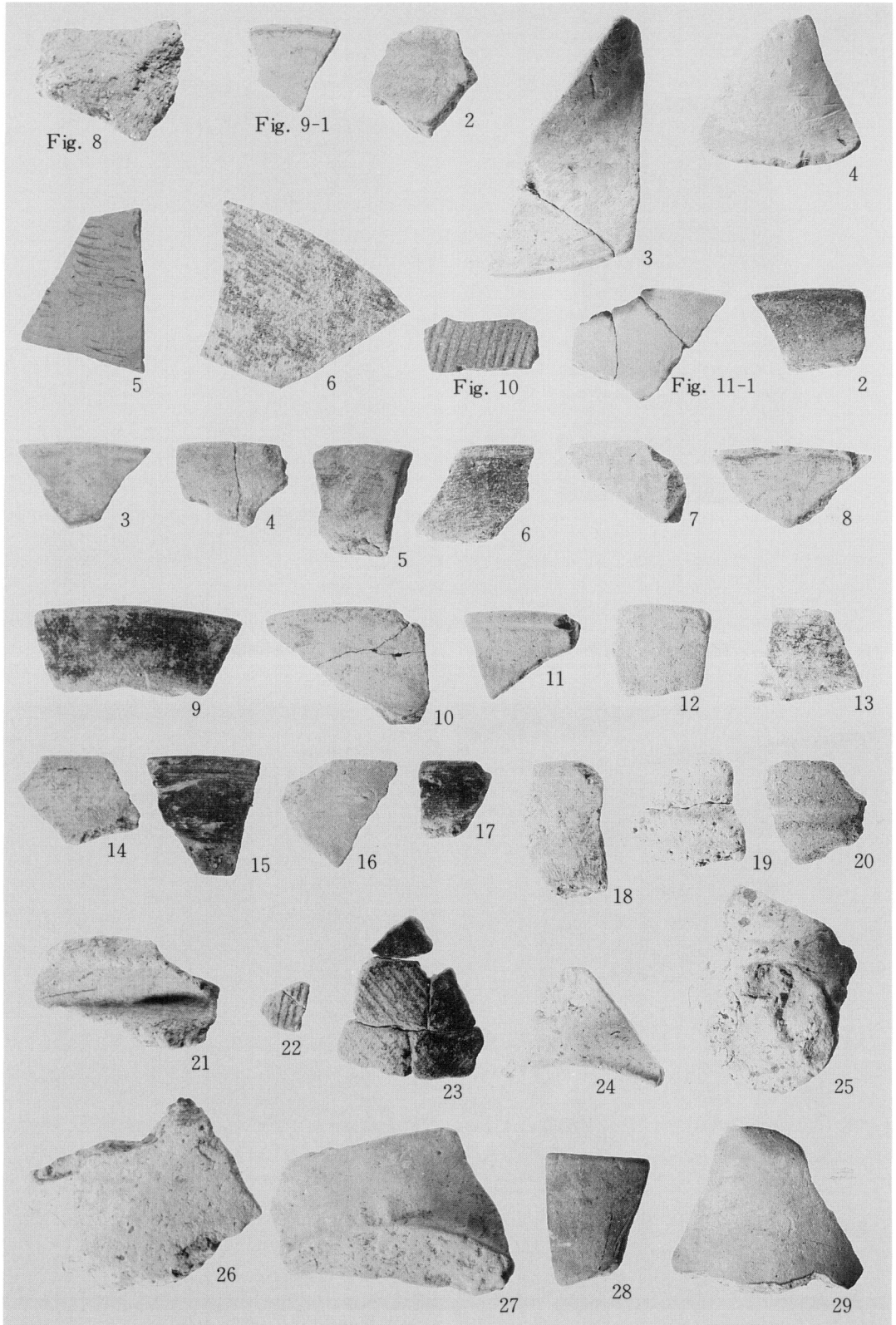
(3) 第7トレンチ全景(北から)



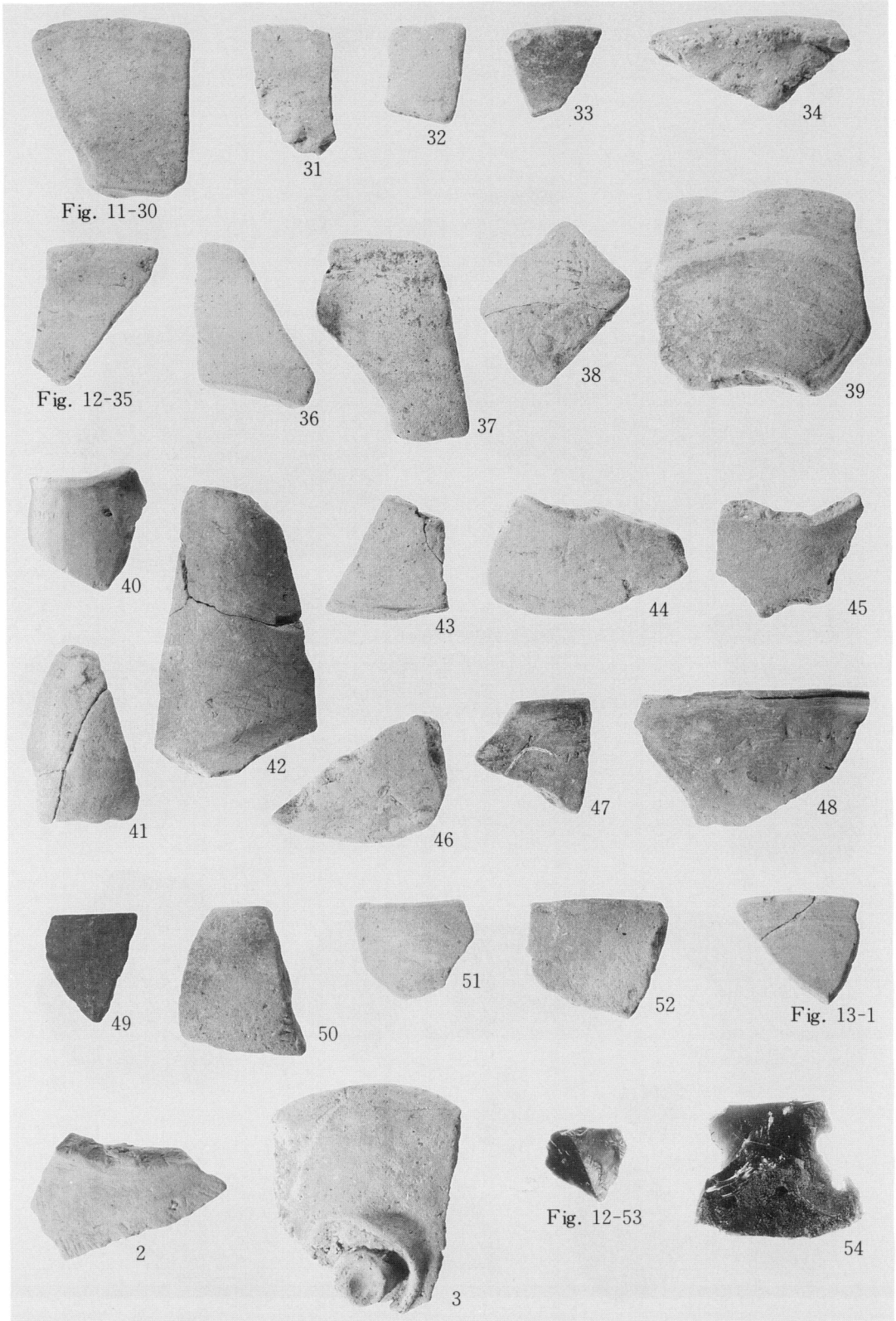
(4) 第8トレンチ全景(南から)

PL. 8

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(8)



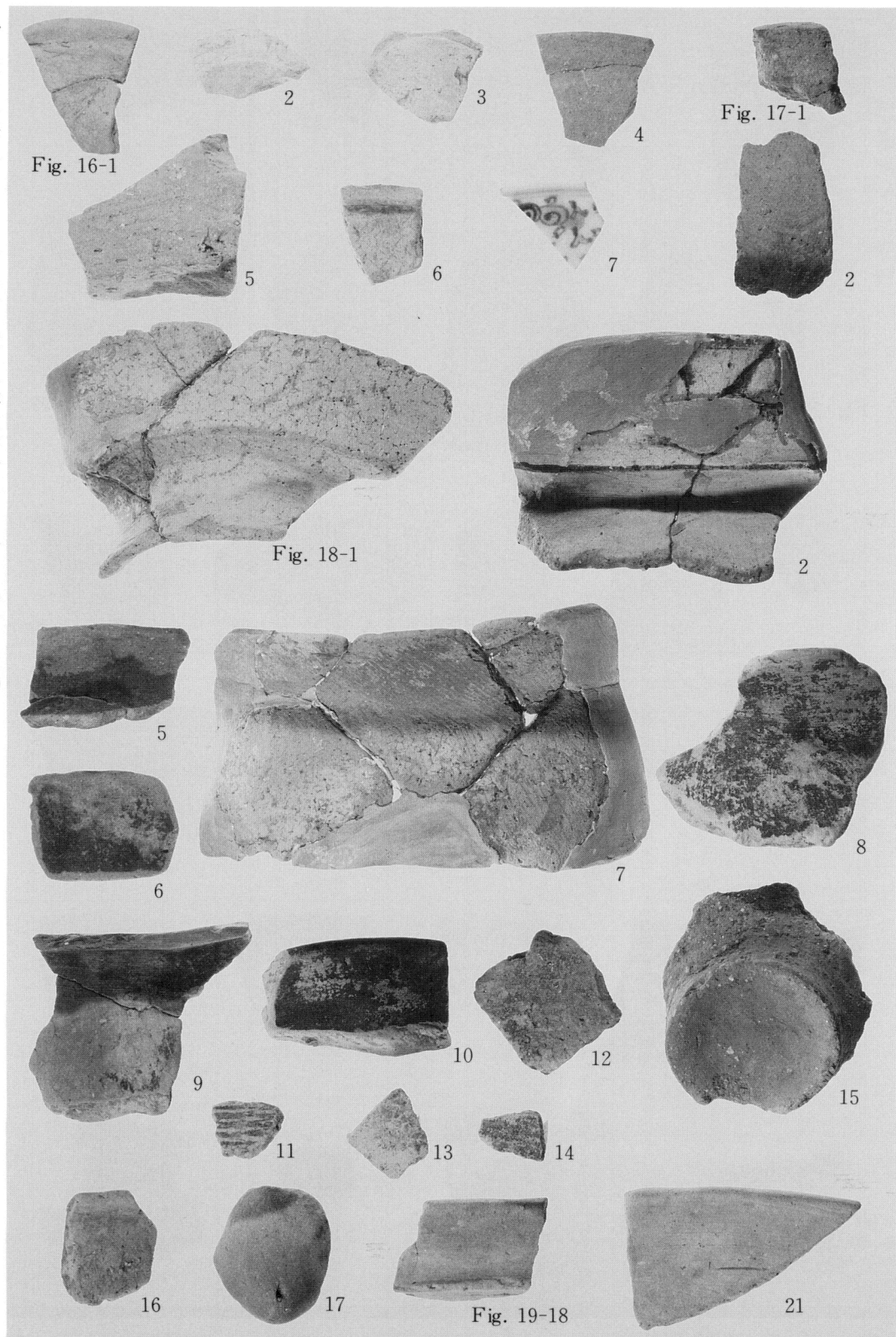
出土遺物 (1) (幼稚園・小学校)



出土遺物 (2) (幼稚園・小学校)

PL. 10

亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査(10)



出土遺物 (3) (中学校)

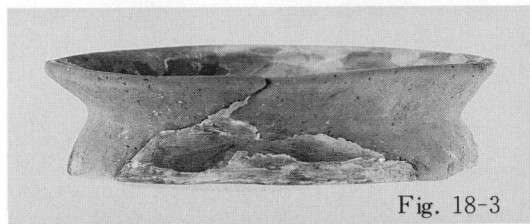
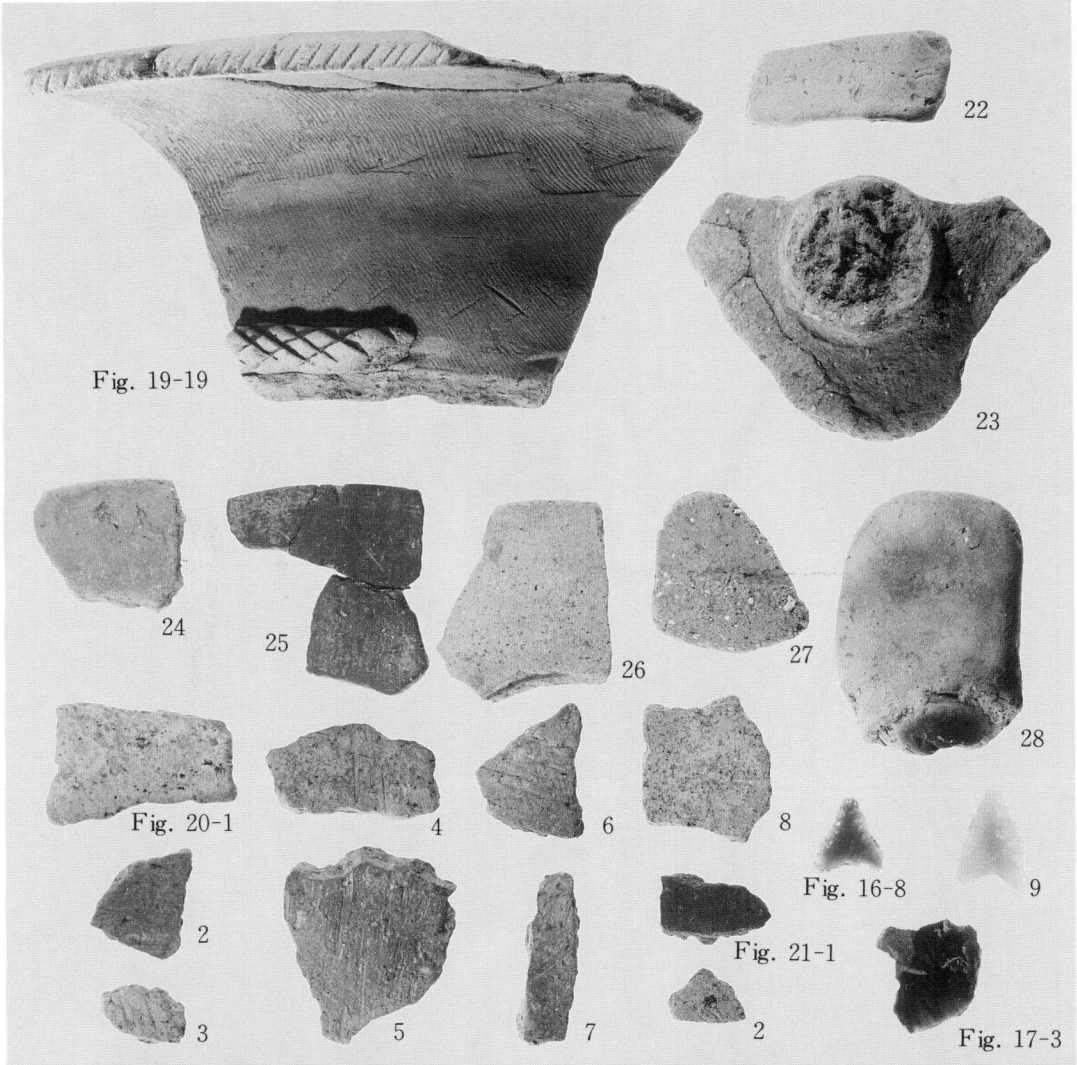


Fig. 18-3

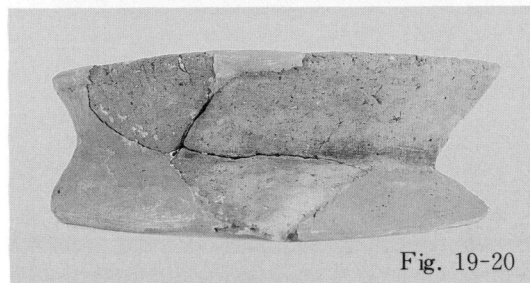


Fig. 19-20

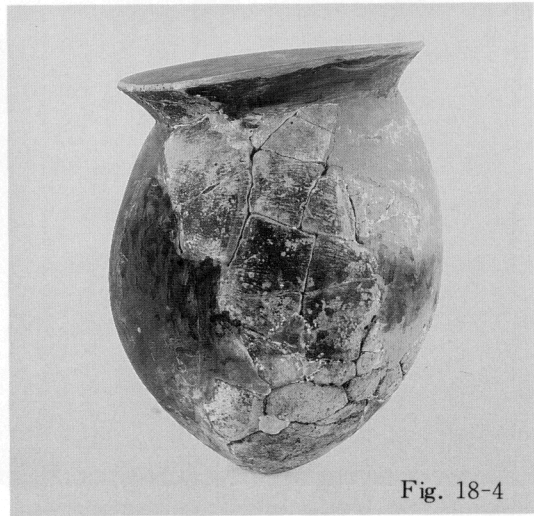


Fig. 18-4